東京学芸大学　2018 年秋学期多文化共修科目 B

多文化社会とコミュニケーション　報告集

2018 年秋学期　木曜日 5 限　N313 教室

作成者：岡　智之（留学生センター）

2019 年 2 月 21 日

目次

授業シラバス 2
受講者 3
授業展開と内容、感想 3
第１回　オリエンテーション 3
第２回　在日外国人問題を知る 4
第３回　在日コリアン問題について考える 4
第４回　難民問題を知る 5
第５回、第６回　沖縄から平和を考える 6
第７回　「障碍は個性か」視覚障がい者ゲストトーク 7
第８回　セクシュアルマイノリティについて　「いろいろな性って何だろう」 9
第９回　プロジェクト構想 11
第 10 回　私の多文化（個人発表） 11
第 11 回　私の多文化２ 11
第 12 回　最終発表１ 14
第 13 回　最終発表２ 14
第 14 回　最終発表３ 14
第 15 回　ワールドカフェ「多文化社会の課題解決に向けて」 14
課外活動 18
朝鮮学校訪問感想文集 18
留学生センター主催講演会「ロヒンギャ難民の今」 21
第３回　東京学芸大学ヒューマンライブラリー 24
最終レポート集 28
「不登校の在日外国人子供への教育支援に関する研究」 28
「マイノリティと言語教育」 30
多文化共生社会と在日外国人の母語教育、不安な点 37
外国人技能実習制度について 40
外国人介護士、看護師日本語能力養成ためのやさしい日本語対応 42
沖縄がメディアで 47
「プロパガンダの歴史」 50
メディアを通じるタイのイメージ 53
トルコにおける女性に対しての差別問題 56
中国における LGBT＋ 59
日本のトランスジェンダー 63
スウェーデンとトランスジェンダー 66

2018　多文化共修科目 B 授業評価アンケート　集計結果 72

授業シラバス

授業科目名	**多文化共修科目 B： 多文化社会とコミュニケーション**
担当教員	岡　智之（おか　ともゆき）
ねらいと目標	多文化共修科目は、日本人学生と留学生をはじめとする様々な文化的背景を持つ学生が、授業という場でお互いに学び交流しながら、新しい気づきを生み出す場です。多文化共修科目 B「多文化社会とコミュニケーション」では、多文化社会に関する理解を深めるとともに、多様な文化を持つ学生の議論や協働学習を通して、多種多様な人々と対等にコミュニケーションを取ることができる能力を高めることを目的とします。
内容	前半は多文化社会に関わるトピック（在日外国人問題、難民問題、沖縄問題、視覚障がい者ゲストトークなど）に関して、基本的な知識を学び、ディスカッションを通して深めます。後半は、グループごとに多文化社会の問題解決を目指すプロジェクトを企画し、発表し、最終レポートとしてまとめます。課外活動として、朝鮮学校の訪問（11/10）、ロヒンギャ難民講演会（11/28）、ヒューマンライブラリーの参加(12/16)などを考えています。ヒューマンライブラリーでは、難民、イスラム教徒、地域の外国人、ろう者、視覚障がい者、発達障がい、LGBT、X ジェンダー、教育支援者などのお話しが聞けます。
テキスト	特に定めません。
参考文献	適宜、授業時に指示します。
成績評価法	平常点 30%（毎回コメント用紙提出）、発表 30%、最終レポート 30%、課外活動 10%+α、最終レポートは A4 用紙 3 枚程度、締め切りは 2 月 14 日（木）担当者にメール添付で送ること。okatom@u-gakugei.ac.jp
授業スケジュール	１．オリエンテーション、２．となりに生きる外国人―多文化共生って何？、３．在日コリアンについて考える、４．難民問題を知る、５．沖縄から平和を考える、６．課外活動報告会、７．視覚障がい者ゲストトークと体験、８．プロジェクト構想、９．私の多文化発表、最終発表準備、10.私の多文化発表、11　発表準備、12-14.最終発表、15.振り返りと全体まとめ
授業時間外における学習方法	課外活動の参加と感想文の提出はセットです。後半のプロジェクト構想と発表に向け、授業外でグループが集まって、調査、準備が必要になります。
授業のキーワード	多文化社会、異文化理解、コミュニケーション、協働学習
受講補足（履修制限など）	受講者が 30 人を超える場合は、受講制限を行います。留学生は、プレースメントテストで、レベル 1 とレベル 2 の学生のみを対象とします。
学生へのメッセージ	日本人学生と交流したい留学生、留学生と交流したい日本人学生の積極的な参加を求めます。課外活動や国際交流活動にも積極的に参加しましょう。

受講者

日本人学生３名（E 類表現教育１年、E 類多文化共生３年、K 類アジア研究４年）
留学生 13 名（日研生６名、交換留学生２名、研究生５名、中国５、トルコ２、ブラジル２、スウェーデン１、タイ１、ハンガリー１、オーストラリア１）

＊1 回目は、日本人４名、留学生 18 名が参加したが、最終的に上記の数となった。日本人学生と留学生の数は、春学期と逆転し、日本人学生の方が少なくなった。日本人学生は正規受講者２名、聴講生１名（留学のため５年次になった学生）、一人は韓国、一人はインドネシアに留学経験がある。留学生は、今回は国のバラエティーが多くなり、まさに多文化共修にふさわしい授業になったかと思う。春学期は韓国人が 4 人いたが、今学期はゼロだったのが残念だった。9，10 回目で私の多文化と題して、一人一人の文化について発表してもらったのも面白かった。

授業展開と内容、感想

第１回　オリエンテーション

授業の紹介、課外活動の紹介、ペアワーク（自己紹介、他己紹介）
受講者の受講動機、期待（受講者アンケートより）：
日本人学生「東京に来た時点で文化の違いに（主に方言）驚いたので、日本より外に出たことのない私にとって、今回留学生の人と関わることで新たな価値観を生み出せるのではないかと思いました。オリンピックもあるので」
「留学を終えて帰国し、再び海外の学生との交流を楽しみたいと思い受講しました。沢山ディスカッションを楽しみたいです。」「在日コリアンに興味がある。半年新大久保に行ったり、近所に朝鮮大学校があるため在日ムスリムの現状について知りたい。机上だけでなくフィールドを通して学びたい」
留学生「日本語を楽しんで学ぶとともに、世界の様々な国の文化や面白いことを知りたいです。このクラスは色々な活動がありますから、日本語の楽しい練習になれると思います」
「くわしく多文化コミュニケーションについて考えさせることを期待しています。普段になかなか聞きづらいことについて聞きたいと思います」
「多文化社会における日本語を知りたいと思っています。異文化／多文化間のコミュニケーションに興味を持っています。」
「マイノリティや二つの国の交流の際であらわれる問題などのテーマもとても関心を持っていて、この科目で学ぶいろいろな多文化社会問題から自分で他のテーマについてもっと知識を高めたいと思っております」
「フェミニズムや女性の社会進出についてテーマも興味深いです」
「様々な国からの情報を手に入れ、生活の中で使えるようにしたい」
「元々、多文化交流に興味があります。シラバスを読んで、ヒューマンライブラリー、難

民問題、LGBT などの内容があると知っていましたので、ぜひ、この授業にて多文化コミュニケーションに対する理解を深めていきたいです。」

第２回　在日外国人問題を知る

在日外国人数、在留資格、留学生数などの紹介の後、DVD『となりに生きる外国人』視聴。

コメントペーパーより：

日本人学生「DVD の映像を見て、来日した外国人で結果的にオーバーステイとなって定住し、日本で仕事をしているという人が非常に多いことや、そのような人たちは仕事上で問題が起きても特にサポートをしてもらえないという点に驚きました。外国人の労働者は今後不可欠な存在になっていくと思うので、日本で労働・定住がしやすい環境を整えていくべきだと強く感じました。また彼らは日本の社会を支える一因であることと、日本でやっていけるように日本語の勉強や仕事を必死にやっていることを周りの日本人が理解し、お互いに支えあい、助け合いができるようになれたら良いなと思いました。」

留学生「働くビザで新しい国に来ている人はどこの国でもいろいろな問題がありますね。DVD で見た内容はとても面白かったです。やはり移民で来て、自分の文化と違うところに生活するのは大変です。日本は特に厳しそうです。スウェーデンでも移民の人は社会に中々入れない場合はあると思うんですが、長い間やってきたし、多文化である社会だし、日本はまだまだだなと思いました。島国でもあるんですね。スウェーデンはやはりヨーロッパのひとつのメンバーだからこそ、ヨーロッパで行う問題はスウェーデンでも問題になるということです。」

第３回　在日コリアン問題について考える

　在日コリアンの町―猪飼野（大阪市生野区鶴橋）の紹介をしたあと、この町で生まれ育った授業担当者の体験を話す。在日朝鮮人がなぜいるのか、その歴史と差別の現状について話す。『まんが　クラスメイトは外国人』の第 2 話ユヘの物語を読んで感想を話し合う。

コメントペーパーより：

日本人学生「マンガを読んで、主人公が日本の友達の態度にショックを受けている気持ちが少し理解できました。日本では、侵略の歴史は教えるけれど、内容があまり深くなく（具体的なエピソードや非人道的なことに対する記述がない）、韓国の人と比べると植民地時代の歴史について知っていることが少ないと思います。韓国で独立運動をして捕まった人が収容され、拷問などをされた刑務所を見学したとき、ショックを受けたと同時に、学校でちゃんと学んだはずなのに自分が、また多くの日本人が全く知らない世界、情報がこんなに存在しているということに衝撃を受けました。このような事実から目を背けず、しっかり学習するようになれば、隣国の昔の出来事で生まれた対立も少しはよい方向に向かうよ

うになるかと思いました。」
留学生：「日本の悪いところを今日の先生のようにこれほどストレートに話す日本人を初めて見ました。ここ何年かドイツは第二次世界大戦で行ったホロコーストについて徐々に国自身から話しはじめるようになりましたが、日本は戦争での満州出会ったことや、朝鮮人についても話さないというイメージがあります。先生や韓国に行ったことのある子の意見と同じ考えがもっと日本の人々に分かってもらったらいいなという気持ちです。」
「中国に朝鮮族という少数民族があります。中の一部は朝鮮戦争で残された人たちです。新中華人民共和国が成立した時に、そういう人たちを中国籍に入れました。今の中国東北地区には、朝鮮族の子どもたちは、朝鮮族学校と漢族学校がありまして、朝鮮族の子どもたちは自由に進学できるという。しかし、多数の漢族の人の中には、やはり朝鮮族の人は外国人であり、中国人ではないという排外性を持つ人はかなりいます。中国政府は少数民族の政策を立つため、ヘイトデモまではいかないですが、もし自分が朝鮮族だと話したら、あの人は外人だという考えがすぐ出てきますと、私の友達が言っていました。私なりの考えですが、もし政府が移民や外国人に対する態度あるいは正しい政策を立てれば、状況は恐らく違う方向へ発展していくと思います。」
「ブラジルでは、日本や韓国や中国などの歴史を勉強しないので、日本でもジェノサイドがあったって想像もしたことがなくてビックリしました。そして、在日朝鮮人たちを同化していて、またその後日本国籍を取り、とても人としてのリスペクトがあまりなかったのに残念と思います。」

第４回　難民問題を知る
難民の定義と現状。シリア内戦とシリア難民。クルド民族とクルド難民。動画「埼玉で暮らす在日クルド人「ワラビスタン」の今」視聴。日本における難民認定者。ロヒンギャ難民について。動画「祈りの果てに」視聴。

日本人学生：「難民の人びとは、難民申請をしても認定をしてもらうことがなかなかできないし、生活していても子供が教育を受ける、体調がすぐれなければ病院に行くなどの私たちからしたら当たり前のことをできない環境下にあるということに悲惨さを感じました。難民を受け入れていくか行かないかのそれだけの問題ではなく、彼らの生活の保障や子供の将来など、熟考していかなければならない課題が沢山あると感じました。」
留学生：「トルコとクルド人の問題を改めて考えさせられた授業でおもしろかったです。私はトルコ人として、子どものころから PKK とかクルド語が禁止されている事とか、トルコの東は別の世界になっていることなどを見ていました。私たちに言われる、おしえられるのはいつもクルド人を責めることでした。小さいころ頃からこんな教育を受けたトルコ人はクルド人をバカにした一方で、子どものころから PKK のせいでトルコと敵だと思うクルド人はトルコ人を殺したくなっています。もしトルコ人は上から目線をやめて、クルド人

も PKK の教えてることだけに頼るのをやめたら一緒に未来を作れると思います。この戦いの中で一番傷つくのは子供なので、Aung Tin みたいな人が必要だと思います。」
「今、ブラジルにも難民でいるベネズエラ人が国の北の方に今数が多いです。アマゾナス、アマパ、私が住んでいるパラにもいるんですが、国が前もって政治が経済的、住むための居場所や、お金を稼ぐためのお仕事などのプラン・対策を考えないまま難民を受け入れたため、来られたベネズエラ人はホームレスのような日々を送っています。もちろん、受け入れることはとても大事なことでもありますが、国が「はい、入ってもよいですよ」と言って、別の仕事を与えないのは失礼だと思います。難民を理解できない、または意見がないブラジル人がいて、身勝手な発言や行動をとり、ベネズエラ人はまともな人生を遅れないことが残念だと思います。」

第５回、第６回　沖縄から平和を考える

　うちなークイズで沖縄問題を知る。日系人クイズで沖縄からブラジルやハワイに移住した日系人が多いことを知る。辺野古新基地建設問題について。映画「戦場ぬ止み」を視聴。

コメントペーパーより：
日本人学生：「沖縄県知事が翁長さんからデニーさんに変わり、その政権公約からしても辺野古に基地建設を進めるのは当分先であろうと思っていた。しかし、執行停止が解除され、工事が再開されるのを新聞で読むと、彼らの想いは何一つ政府に届いてない（いや、政府が受け入れようとしない）のであり、やはり沖縄戦の延長というか、国は日本であっても意識として平等にない、うちなーとやまとで分断されているのだと感じた。映画を見て胸がとても熱くなった。心は反対でも仕事やお金、生活のためには反対と言えない、背に腹は変えられない状況が、特に若い人（生活を立ててない人）に多い、仕事をしている人に多いのではと感じた。脅迫や金でヒトをつるような作戦はとても無力感を感じるし、同じ日本人として政府の行動は恥ずかしい。今は沖縄戦経験者もいて強い想いというのが、ブレないけど、基地が完成してしまって、その後に生まれた子どもたちにとっては、それが当たり前となる…反対する強い想いを持てるのだろうか。ますます今後が危ぶまれる。外国の軍が国内に駐屯する、又はいまだに支配関係の中にいる、そんな国はあるだろうか。独立国であるのに。主体的に行動できない、そして沖縄との乖離を感じる。」
「どっちが正義なのかわからなくなります。同じ日本人なのにぶつかり合う意味とは何なのか考えさせられました。根本的な解決にはならないと心のどこかでわかっているけどそれでも抵抗せずにはいられない住民と、仕事だからと心を無にしている防衛の人たちに悲しくなりました。私は表現教育コースなので、多くの人に表現を用いて訴えるこの映画は今後の私の活動の参考にもなりました。現場で直接闘うことも手段としてありますが、メディアや表現も大切だなと感じました。」
留学生：「沖縄の動画を見ると感動され、涙が出た。そんな苦しいことはまだ続いているの

は非常に悲しいと思う。これを見た後、なぜ多くの沖縄人が移民したのはもう少し理解できた気がする。」
「ビデオの中で流れていた歌を聞いていただけで戦争が残った悲しみを感じました。戦争や新しい基地とか自分の住んでいるところを守りたい沖縄の人たちの気持ちが伝えられました。一番悲しいのは市民が警察に質問しても答えが出ない場面でした。沖縄の市民の声が日本政府に届いてほしいです。これ以上同じ国の人たちの間で争いが起こらないことを願っています。」

第７回　「障碍は個性か」視覚障がい者ゲストトーク

山口通さん。全盲の元高校教員。アイマスクをして白杖をもって、ブラインドウォーク、もう一人は介助役をする。教室内を歩く。後ろのホワイトボードに、アイマスクをして文字を書く体験。毎日新聞記者が来ていて取材。毎日新聞武蔵野版 2018 年 12 月 15 日に記事がのった。

コメントペーパーより：
・今日は不思議な経験をしました。全盲の元高校教員の山口通さんはお越しいただき、素晴らしい講義をしてくれました。ありがとうございます。今まで、障害のない人にとって、障がい者たちどのように生きているかぜんぜんわかりません。今日の講義を聞いた後、山口さんの楽観とユーモアに感銘しました。もし私は目が見えなくなったら、絶対にがっかりして、希望と夢も失うかもしれないです。でも、山口さんは、自分らしい生活を送ってるんです。その他に自分の生活にも楽しんでいます。山口さん、がんばります！
・実は私が山口さんに最も聞きたい問題は、これから目が見えなくなるということを知った時、一番見に行きたいことは何だろうか。この場面は絶対一番大事なのことだと思います。私は大学時代で、障碍がある子どもたちにボランティア活動をしたことがあります。このとき、子どもたちはやはり普通の人たちと同じで、しっかり勉強し、ちゃんと食事をし、仲間と一緒にスポーツをするなど、ぜんぜん障害がないと見ることができると私は思っています。この場面は私は一番感動しました。12 月 16 日に山口さんは再び学校に行けると聞きました。このとき、ぜひ、この問題を聞きたいです。
・全盲という方に触れあうことが初めてです。自分がマスクをかけて歩いているときに、とても心細くなっていました。目が見えないため、ほかの感覚や、杖そして隣の人に頼るしかないことを気付き、とても悲しくなりました。そしてほかのクラスメートが、ワークショップをしていることを見て、時間がわりとかかりました。やはり、普段は障碍者に対して、焦らない、そして丁寧につきあうことが大事です。自分にとっていたって簡単なことは、からだの不自由な人にとって、極めて容易なことではないと分かりました。
・アイマスクをかぶって、全盲の体験をしてみると、やっぱり怖いと思った。周りの状況が確認できず、触れられる範囲も腕の長さによってかなり限られていて、未知に囲まれて、

不安をものすごく感じた。山口さんが話してくださった日本の現状に感心した一方で、中国の現状は思い出した。日本より障害の方への支援や認識がずっと不足している中国では、安全問題はともかく、障がいの方が生きていける環境はどのように厳しいでしょうかと思う。

・体験はとても面白かった。駅などで障がい者を見るときにどうやって生活するとかいつも考えたので、今日は少し理解できた気がした。今は障がい者が他の人と一緒に差別なしに生活するのはまだまだだと思うが、それ少しずつ変わってきていつかそのような社会になると信じる。山口さん、本当にありがとうございました。

・視覚障碍者の方のお話を聞いたのは初めてでした。私たちとはかなり違う生活であったり、世界を感じているというイメージが初めは多少ありましたが、目が見えないことで苦労することや大変なことも多いものの大きく異なっていないと知ることができたのがとても新鮮でした。だからこそ、職に就くことが困難である現状や、公共の場所の安全を配慮した設備等の改善を進めていくことの必要性をより強く感じました。

・ブラインドウォークをして…　目が回りそうだった。早く動くことが難しかった。アテンドの人に頼り切るので恐い。杖が長時間もつには重い。

　ワークショップを見て…　何でそんなに時間がかかるのか不思議。目が見えないと周りの意見に集中する少なくなるのかなと思った。図が描けるのがすごいと思った。

　質問について…　日本は障がいの人に対しての配慮があまり進んでいないんだなと思った。優先順位が低くなっているのはどうにかしないといけないなと思った。

　感想…　目が見えなくても笑顔で強く生きている姿がかっこよかったです。同情とかされることよりも理解してもらえるほうが大事なんだなと思いました。自分中心で考え過ぎず、広い目で周りを見てみようと思いました。

・今は障碍者について聴けてとても面白かったです。日常生活の中に困ることが多くて、小さいことでも周りの人と違うやり方を考えないといけないといことです。社会上外になってしまったり、仕事を見つけられなかったりすることもあります。安全ドアについても、色々なかんたんに、障害者のためにできることがたくさんあると思いますが、人口の少ないパーセンテージのために政府はなかなか頑張らないということは事実です。目が見えない体験をしても、自分は目が使えなくなったら大変困ると分かりました。山口さんの話を聴いて、すごい人だなと思いました。こういう人に会えるというのは光栄だと思います。

・ワークショップでは私はホワイトボードに文字を各チームでした。正直、説明がよくわからず、変な発言をしてしまってはずかしい気持ちになりました。説明をするときは話を聞くだけと思いがちですが、ヴィジュアルを見つつ、日々説明を受けているのだなと思いました。目を隠されたときは自由に動くのはもちろん、発言やふるまいにさえも不安を感じました。山口さんは日々このように生活していらっしゃるのにこんなにも落ち着いていらっしゃってすばらしいと思います。日々生活していて、すぐにイライラしたり、落ち着きのない、物事がすばやく出来ないとおこる自分がいいかげんに感じました。

・私の母親が機能障害者の 1 人でして、母はいつも人に何を思われるかに対して心配していました。7 年たった今は、自分を受け入れることができて、山口さんがおっしゃった通り、1 つの個性として障害を受け入れて人生を歩み続けています。私の国は障害者の方たちの為、交通をよくするなど、図書を適応するのは今だにも少なくて、困っていることです。でも、今日のように、様々の国の人達が聞いて、もっとこのテーマについて広まっていくと信じています。障害ではなく、障生に変わる日が心から楽しみにしています。
・最初にマスクをつけて歩く体験に怖くて参加したくなかったです。私は体験だけでこんなに怖くなるのに障害者の人々にとって、その体験は人生そのものなんです。それを気づいて初めて障害者の立場から世界を感じるようにしました。以前は映画や水の中で描写されている人物はいつも暗くて、全然人生を楽しめない人ばかりでした。でも山口さんは本当に過去より未来を考えて、前に進む人で、私も心の中がうれしくなりました。
・私は今まで一番こわかったのは、「目が見えなかったらどうなる」ということでした。2 年前腕に問題があって、自由に動かせなくなった時はこの気持ちはもっと強くなってました。それからはいつも体に気をつけていますが、「もし何かあったら」という気持ちは消えないのです。今日山口さんの話を聞いて「私たちには見えない世界があるんだ」と考えました。目の前に存在しているが、私たちはそれを気づかない。このことは恐ろしいと感じました。最後の演奏もとてもきれいでした。感動しました。
・障碍者の中には、うまれてから不自由になった方も、生きている間に不自由になってしまった方もいます。私にとっては生まれてから不自由になったかたより生きている途中に不自由になった方の方が大変だと思います。なぜなら、普通に一般な生活から変わったからです。不自由に対して、体のことよりも心の方が大切だと考えています。人生の最高のことは幸せに生活できることで、どんな体でも幸せに生活できたら、「不自由」ではなく、「自由」の人の方が言うべきです。日本は障碍者向けのサービスやうまく生活できるようにサポートする機会がいっぱいあります。その点は、国民の民度を考えて、一つの発展国を表す要因だと思います。

第 8 回　セクシュアルマイノリティについて　「いろいろな性って何だろう」

LGBT に関する NPO　Rebit の作った、小学生向けの「いろいろな性って何だろう」という授業教材を使って、動画を見て、学習。後半、感想を話し合った。ディスカッションは今までになく、大いに盛り上がっていた。

ワークシートの感想：
（1）いろいろな性について考えたことや感じたことを「前は～と思っていたけれど、今は…と考えるようになった」という形で書いてください。
（2）いろいろな違いを大事にするために、あなたができる工夫はどんなことですか？

日本人学生

（1）・前は性別は 2 つだと思っていたし、女性として女らしくあるべきと思っていたし、親にも「女の子なんだから」というのをよく言われた。

・今は性別は想像以上にたくさんあるし、全てを理解するのは難しい。だからこそ性別や体で考えるのではなく、その人自身、そして自分自身という捉われない一人の存在として考えるようになった。

（2）LGBT の知識が多少なりともあるからこそ、自分の言動に気をつける。（男性に「女子力高い」というのは結構言っていた。）あまり固定概念をもってそれを他人に強制しない。／自分と相手は違う、ということを受け入れる。／色眼鏡ではなく、その人自身を尊重する。／相手にとって相談できる人、悩みを共有できる人、互いに支えあえる存在になる。

タイ人学生

（1） 前は、タイでは様々な性ということが当たり前のこととされています。それで、私にとって性別で人を分けなくて、人の心や行動で分けることにします。どんな性でも認められます。みんなは人間で同じです。今①は、たくさんの LGBT と仲良くして友達になりました、長い期間で付き合っていますから、LGBT の考えや心などのメンタルな面は普通の性別より美しいなっと発見しました。

（2） ①LGBT を普通の人間とすること

②LGBT といい友達になること

③「LGBT は普通の人間だよ。平等だよ」と LGBT を差別する考えを持ち人に説明すること。

④LGBT の人が悩んでいるとき、相談役として彼らの話を聞くこと。

ハンガリー人学生

（1） 前は、男は女と、女は男と恋をして、それが世界のハーモニーのような考えを持っていました。今は、ゲイやレズビアンの友達を何人か持っています。「ゲイだから、レズビアンだから」仲良くしているのではなく、性格が合うから、好きです。

（2） 性格そのものを見て、好きか嫌いか決めることを心がけています。たとえ、あまり気が合わず、仲良くできなくても、それは性格上の問題だ、ジェンダーは関係ないと考えることが大切だと思っています。

スウェーデン人学生

（1） スウェーデンから来て、やはり日本とかなり違うところが大きと思います。これに関して、今スウェーデンでは、性を言わなくてもいいキンダガーデンなどもあります。私はこの動画を見たら「まだ、ここまでしか来られていないな」と考えます。

（2） 他の人が悪いことを言ったら、それを受け入れないようにするのは大事だと思います。一緒に笑うのは一番簡単かもしれないが、だめです。この小学生向けの動画は結構軽かったが、本当に苦しんでいる人も多いし、LGBT の人々の中、自殺が多いので、何とかしないといけないです。

第 9 回　プロジェクト構想

12 月 16 日のヒューマンライブラリーに参加した人の感想を共有し、後半は最終発表のグループを作るために、一人ずつテーマを発表し、グループづくりの話し合いを行った。

第 10 回　私の多文化（個人発表）

前半は、私の多文化と題して、一人 5 分程度で、自分の中の複数の文化について話してもらった。後半はグループ別に発表準備の討論を行った。

「私の文化・トルコの支配方法」トルコ社会に絶望している若者が多いという話。

「(中国の）キャッシュレス社会」

「南京の人から日本人へ」南京の人は日本の人と友達になりたいというメッセージ。

「スウェーデンとマイノリティ」スウェーデンの少数民族や LGBT の話。

「言語と私の多文化」インドネシアに留学して、言葉が自分の多文化になったという話。

コメントペーパーより：

「今日はいろいろな「人」の多文化を知れてとても面白かったです。とくにインドネシアへ留学へ行った方の「言語が私の多文化」と言ったときは、共感を呼ばれて、私個人の多文化だけではなく、ブラジルの 1 番の多文化ではないのかと考えさせられました。次の授業で私の「多文化」について話すのが楽しみです。

第 11 回　私の多文化２

正月明けの授業。私の多文化の発表を行う。発表の時間が長引いたので、最終発表の準備の時間が取れなかった。発表の順番を決めた。

「日本の町とタイの町」日本の町がなぜきれいなのか、ごみ分別の比較。

「私は気持ちを伝えたい」

「私の言葉」中国語、英語、日本語が 30%ずつを占めている自分。言葉の境をなくしたい。

「私の多文化」ブラジルと日本のあいだに存在する自分の家系。

「ソウル留学」飲み会文化。その国になれたいならその国のコミュニケーションになれよう。

「ハンガリー」社会主義時代がトラウマになっている。トラウマをユーモアにするところがいい。

「私の多文化」クルド人を悪いイメージで教育されたが、近所に来て、友達となり考えが

変わった。
「不登校の在日外国人の子どもに関する報告」
「ミュージカル」ミュージカルにはいろんな文化や社会問題が入っている。芸術は世界を知るきっかけになる。

最終発表評価基準表

	よくできました（A）	もう少し（B）	改善の必要あり(C)
声の大きさ・明瞭さ・速さ	・教室全体に声が届いており、速さが適当で、最初から最後まで内容がよく聞き取れる。 ・間がうまく取れている。	・教室全体に声が届いているが、時々、早すぎたり、遅すぎたりして内容が聞き取れないことがある。 ・間の取り方に改善必要。	発表全体を通して、教室全体に声が届かず、端では内容がよく聞き取れない。話す速さが早すぎる、もしくは遅すぎる。 ・メモの棒読みの感じ。
身振り・手ぶり・表情	・身振り・手ぶりを上手く使っている。表情が豊かである。	・身振り・手ぶりを時々使っている。表情が時々見られる。	・身振り・手ぶりはほとんどない。表情がほとんどない。
視線・アイコンタクト	発表全体を通して、聴衆をよく見ている。アイ・コンタクトが取れている。	発表中に、聴衆を見ていないことが時々ある。	発表全体を通して、聴衆を見ていないことが多い。ずっと下を見て、メモを読んでいる。
内容	・発表の内容をよく準備したと認められる。 ・独自に調査した内容（フィールドワーク・インタビュー、アンケートなど）が盛り込まれている。 ・自分の独自のアイデアや意見を盛り込んでいる。 ・論旨が簡潔に表現されていてわかりやすい。論旨が十分に説得力を持っていると認められる。 ・発表内容に知的なユーモアが感じられる。	・内容を準備したが不足している。 ・文献やインターネットで調べたことはあるが、独自に調査した内容があまりない。 ・自分の独自のアイデアや意見があるが、少ない。 ・論旨がまあまあわかるが、聞き手が理解しにくい部分もある。ポイントもやや不明瞭である。 ・発表内容に少しユーモアが感じられる。	・内容はあまり準備できていない。 ・文献やインターネットで調べただけでが、独自に調査した内容がない。 ・自分の独自のアイデアや意見がほとんどない。 ・論旨がわかりにくい。聞き手が理解に苦しむ。ポイントが不明瞭である。 ・発表内容に知的なユーモアが感じられない。単調である。
機器・資料の使い方	・機器を適切に使い、資料が豊富で、わかりやすい。資料の出典が示されている。	機器・資料を使っているが、提示が分かりにくい。資料の出典の提示がわかりにくい。	機器の使用でまごつく。資料がない。提示が分かりにくい。資料の出典を示していない。

質疑応答	質問を正確に理解しており、応答が的を射ている。応答は誠意を持ったものになっており、やり取りが建設的である。	質問を正確に理解しているが、応答が的を射ていない。応答は誠意を持ったものになっており、やり取りが建設的である。	質問を正確に理解していないために、応答が的を射ていない。応答が攻撃的であり、質問者や聞き手に不愉快な思いをさせている。
発表時間	発表時間は、規定時間内であり、ぎりぎりまで有効に時間を使っていた。	発表時間は、規定時間より若干遅れた。または、若干早い時間で終了した。	発表時間は規定時間を大幅に過ぎた。もしくは大幅に早い時間で終了した。
チームワーク	メンバー間でのコミュニケーションが十分に取れており、協力して発表を進めているように見える。発表に対するメンバー全体の熱意が感じられる。	メンバー間でのコミュニケーションがまあまあとれており、協力して発表を進めているように見える。発表に対する熱意が感じられないメンバーがいる。	メンバー間でのコミュニケーションが取れておらず一人に任せきりにしている、もしくは一人が勝手に発表を進めているように見える。

最終発表評価シート）

・評価基準表に基づいて、A,B,C を記入し、コメントを書いてください。

発表年月日：　　年　　月　　日　　評価者：

グループテーマ：

発表者：

発表テーマ：

個別評価：声の大きさ（　　）、身振り手振り（　　）視線（　　）、内容（　　）、資料の使い方（　　）

質疑応答（　　）、発表時間（　　）

いい点コメント：

改善点コメント：

全体感想：

第 12 回　最終発表 1

聞いている人は評価表に基づき、評価やコメントを書き、それを後でフィードバックして、最終レポートに生かすことを伝えた。詳しい内容は、最終レポート集で。

第 1 グループ「在日外国人が抱える問題」
「不登校の在日外国人子供への教育支援に関する研究」
「外国人児童生徒への日本語教育」
「マイノリティの言語教育～海外の事例から見た一考察」カナダとオーストラリアの事例。
　「母語教育」
「外国人技能実習制度」
「異文化間コミュニケーションから考える　外国人看護師、介護士養成のためのやさしい日本語」

第 13 回　最終発表 2

第 2 グループ「メディア」
「沖縄　沖縄の光と影（普天間）」
「日本称賛番組　植えつけられる「日本」」
「プロパガンダ　ポスターが創り出すもの」
「タイのイメージ　日本のメディアが映すタイ」

第 14 回　最終発表 3

第 3 グループ「性差別とジェンダー」
「男女別育児休業」
「トルコにおける女性に対する差別問題」
「LGBT+」
「トランスジェンダー　日本」
「スウェーデンとトランスジェンダー」

第 15 回　ワールドカフェ「多文化社会の課題解決に向けて」

授業の最期のまとめとして、ワールドカフェ形式で、「多文化社会の課題解決に向けて」というテーマで話し合いを行った。3～4 人ずつの 4 グループにまず分かれる。

第 1 ラウンド：テーマ「多文化社会とは？多文化共生とは何か」例を挙げてみる。ひとことでまとめる。テーブルの模造紙に書いていく。

第 2 ラウンド：一人ホストを残して、他の違うテーブルに散る。各テーブルでどういう議論が出たかお互いに紹介。「多文化社会の課題とはなにか」話し合う。

第 3 ラウンド：元のテーブルに戻る。第 2 ラウンドで出た話を共有する。「多文化社会の

課題解決に向けて何が必要か、何ができるか」アイデアを出す。テーブルで話をまとめる。各自、今日の話し合いでのキーワードをポストイットに書く。

全体セッション：テーブルごとに書いた模造紙とキーワードをホワイトボードに張り出す。テーブルごとにどんな意見が出たか発表。

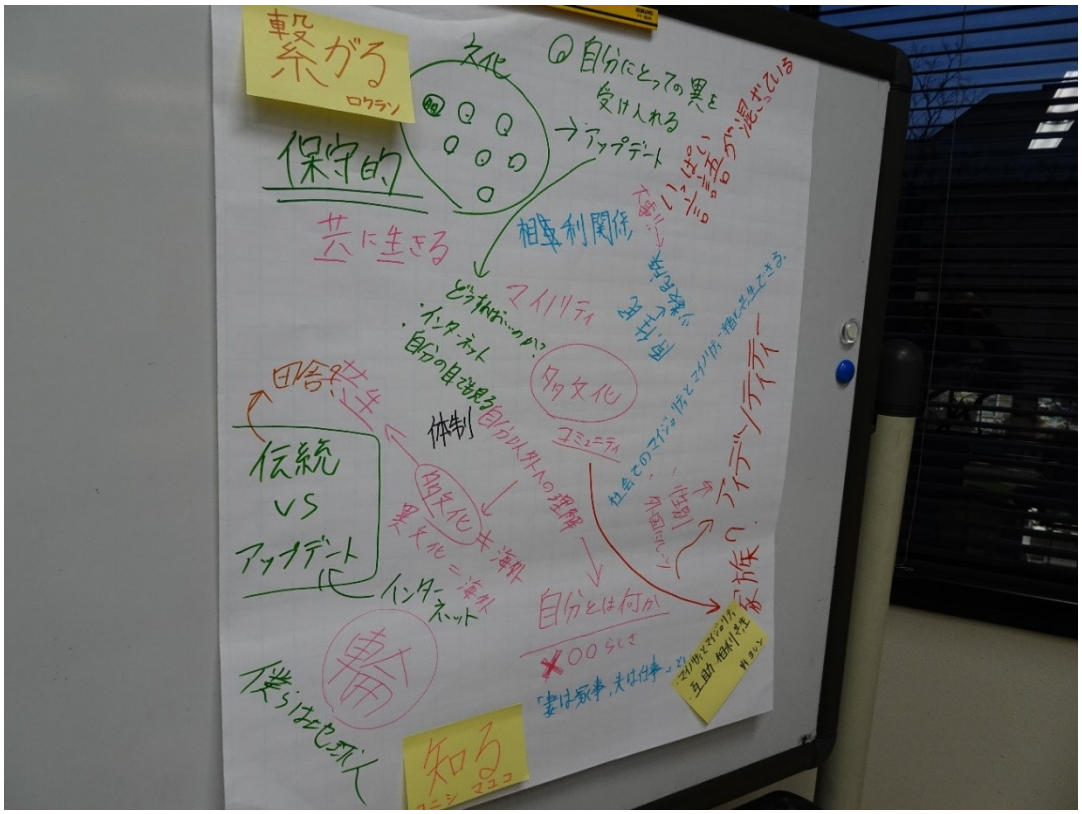
ワールドカフェの様子：

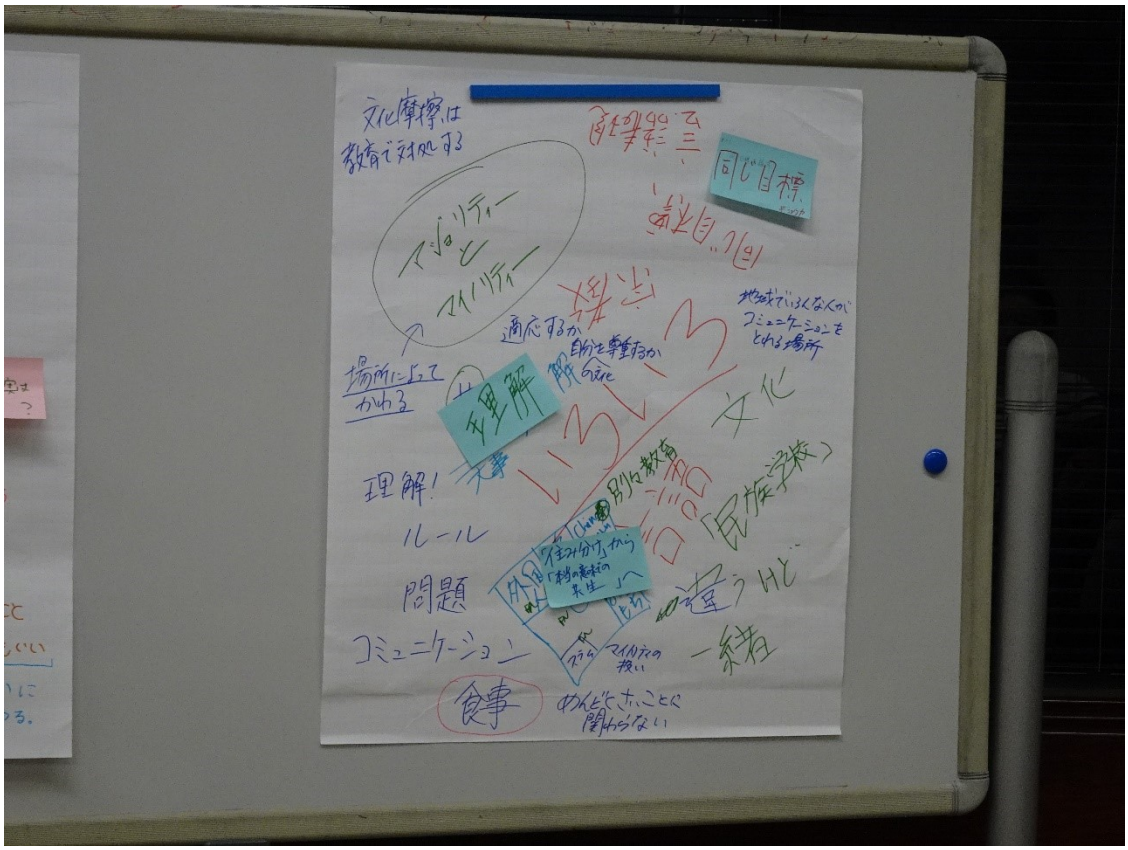
模造紙とキーワード

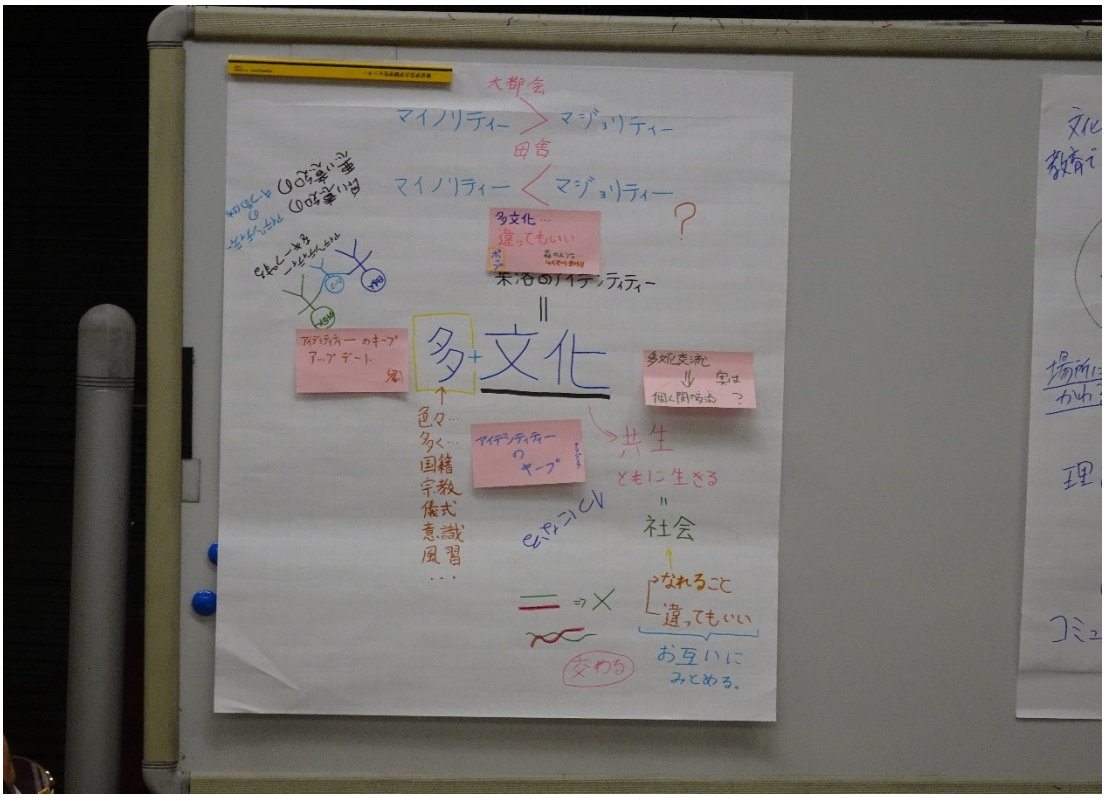
「つながる」「知る」「互助・相利共生」

「慣れる」「受け入れる」「交わる」

「同じ目標」「理解」「「すみ分け」から「本当の意味の共生へ」「多文化交流実は個人間の交流」「違ってもいい」「アイデンティティのキープ」


繋がる
ロクラン
文化
保守的
芸に生きる
相互利関係
アイリティ
多文化
コミュニティ
伝統
vs
アップデート
体制
自分とは何か
アイデンティティー
家族
知る


文化摩擦は
教育で対処する
マジョリティー
と
マイノリティー
同じ目標
適応するか
自分を尊重するか
場所によって
かわる
多様解
文化
理解!
ルール
問題
コミュニケーション
食事
一緒


大都会
マイノリティー
マジョリティー
田舎
マイノリティー
マジョリティー
多文化…
違ってもいい
未来のアイデンティティー
多
文化
色々…
多く…
国籍
宗教
儀式
意識
風習
…
共生
ともに生きる
社会
なれること
違ってもいい
お互いに
みとめる。
交わる

課外活動
朝鮮学校訪問感想文集

日時：　2018 年 11 月 10 日（土）　9 時受付～　17 時まで
場所：　西東京朝鮮第一初中級学校（東京都立川市錦町 4 丁目 7-12）
　　JR 南武線西国立駅から徒歩 5 分
スケジュール：
8：30　西国立駅前集合（中央線立川駅から南武線に乗り換え一駅）
9：00　受付開始　～12:25　公開授業
13:30-14:30 芸術公演
14:30-17:00 校長との懇談会、部活動見学

参加者：11 名（日本 1、中国 2、韓国 4、ブラジル２、トルコ 1、スウェーデン 1）

西東京朝鮮第一初中級学校・附属幼稚班訪問の感想文

「国語ではない国語」

世界にはい様々な生き物を含まれていますが、人間同士でも気が付かなく自動的に自分と同じではないものを分けて、違うと判断すると考えています。日本社会には愛国心が強くて外国人を認めない人がたくさんいると言われています。また、「昔の戦争」、「地域の独占権利の問題」、「原爆」に関するニュースもよく放送されていて、日本と朝鮮の仲がよくなさそうにみえるでしょうか。さらに、授業で見たビデオ、資料にある漫画のような教材で日本に存在する朝鮮人達がつらさそうにイメージがされましたので、朝鮮学園訪問する前、少し悩んでいました。しかし、西東京朝鮮第一初中級学校・附属幼稚班に自分の目で見に行ったら、実際はそのようにつらいことではなく、子供たち、学生の親、韓国人の先生、皆さんが幸せに生活する姿を明らかになりました。

私にとって、今回は初めて海外の学校に訪問する経験ですので、様々な新しいことが見つかって、面白くなりました。まずは、私が卒業したタイにある初中級学校と違う教え方です。私の時代では初中級だけでなく大学まで主に試験が合格できるように授業で勉強した知識、情報を暗記させていました。授業で活動もありますが、グループワークや発表のような活動だけです。一方、今回訪問した学校の教え方は学習者に中心してタッブレト、パソコン、CD のような面白い教材も使って、グループワーク、ゲーム、クイズ、クラスショーのような活動も使って学習者が楽しんで勉強できることと見られます。次は、学生の人数ということです。タイの学校だったら、クラスに 3 室の教室以上あって、一室の教室には 40 人以上の学生がいます。その点で学生全員に目が届くことができなくて、問題になり

ました。普通の学校と言えなくて日本にある朝鮮人向けの学校ですが、タイの一般的な学校と比べるとタイの学校より品がよさそうだと思います。
今回の朝鮮学校の訪問の一番気になるのは、日本にいる朝鮮人の「国語」とはどれだろうかということです。東京学芸大学の授業で、「国語」と「日本語」は違うとわかりました。日本の「国語」とは、日本人が勉強する日本語で、「日本語」とは外国人が勉強する日本語です。それで、日本に存在している朝鮮人の国語はどれでしょう。日本に生まれて生活する点を考えてみれば、日本人と同じ「国語」は適当そうですが、朝鮮系も混じっていて外国人の「日本語」を勉強するかもしれません。日本に住んでも、名前・国籍は朝鮮人で「朝鮮語」を国語とする可能性もあります。それでは、もらった資料に書いてある「初中級部時間割」の表で、「国語」も「日本語」もかいてあるので、答えをわかりました。日本に生まれて育てられても、朝鮮人にとって「国語」とは日本の「国語」ではなく、自分の国籍通り「朝鮮語」を「国語」とされています。
このように、「国語」を決める要因は居住地ではなく、その人に選べた「国籍」ではないでしょうか。

東京朝鮮学園　１１月１０日見学 感想

まず、スウェーデンでは朝鮮について悪いイメージしかないである。学校で何回も例として世界の最悪な国だと言われたことがある。独裁政権について勉強したら、北朝鮮は必ず出てくる。餓死・拷問・不自由な生活などの話を聞かせる。したがって第三次世界大戦が起こったら北朝鮮のせいだと思われている。それで子供も大人も、朝鮮のことが怖いと思う。

初めて朝鮮学校というのはあると聴いた時、びっくりした。なぜやっとあのひどい国から逃げられたら、自分の子供を朝鮮学校に行かせるのだろうと思った。授業で少し分かってきたのもあるが、見学の後、様々なことは理解し、今は前と違うように考えている。それはなぜかと言うと、授業で参加させていただいき、生徒も先生も親も自分の文化で、母国語で、教えたり、習ったりしたのを見たからである。先生は伝統的な衣装を着、朝鮮語で授業をし、生徒は朝鮮風な制服を着る。周りの社会に差別されることが多いであろうが、学校に行くとき自分たちのアイデンティティを誇りで持てる。

小学校三年生の娘がいる母親と話し、朝鮮学校に行っているので、安心できるとおしゃった。仲間という考え方が強く、子供たちだけではなく、両親もできるだけ助けてあげたりもらったりするのは大切されているようだ。やはり差別されるのは心配だから、高校も朝鮮学校を選ぶとおしゃった。一方で娘さんは日本の高校、または大学へ行きたがるなら、娘さんに選択させるようだ。

これを聴くと、同化について考えさせられた。新しい国の文化に合わせるのも大事だと思うが、親として自分の子供が学校でも、社会でも、平和な生活をさせてあげたいのだろう。仲間は人間に非常に重要である。朝鮮学校でしか繋がれない関係があるので、激しい環境にいてもそこから力をもらえるのだろう。もちろん、日本社会は変化させないなら変化しないであろうが、子供たちのために安全な居場所を作るのは一番大切ではないのだろうか。

見学ができてよかったと思う。朝鮮に関る考え方が変わった。以上で。

朝鮮学校の初印象

以前中国のテレビ番組で、「外国人向けの学校が作られる」というニュースを見たことがあります。それがどんな学校でしょうか。外国人向けの学校は一つの謎として私の頭の中で生み出してきました。中国生まれの私にとって、外国人が中国で生活するという問題に全然気づかないといっても過言ではありません。それは中国の人口が多すぎるからかもしれません。そのため、中国に住む外人についての問題はほとんど考えたことがなかったです。

今、日本にいる、もう外国人になった私は、なんとなく自分の国籍とアイデンティティを考え直せざるをえないです。外国人は今どんな形で日本に暮らすか、それは外人としての私がだんだん気になっている課題の一つです。それに、以前から、ずっと北朝鮮の問題に興味を持っていて、朝鮮族をさらに知りたいために、朝鮮学校に見学に行くことにしました。

西東京朝鮮第一初中級学校が三つの級部に分けます。それが幼稚園、小学校と中学校です。授業は朝 8 時 55 分から 12 時 25 分までです。午前中に違って、午後がすべて部活だと聞きました。校長先生のご案内で、私たちは朝鮮族の生徒たちの授業の雰囲気を現場で感じました。普通の授業とずいぶん違ったねと、女の先生が伝統的な服で授業をする姿を見ると、みんなが驚きました。生徒たちはみんな活発で、授業で遠慮なく自分の意見を言い出した。「日本語」と「英語」の授業以外、先生がすべて朝鮮語を喋ります。韓国の友達の話によると、なんか発音が韓国人にちょっと違って、北朝鮮に似ていると聞きました。自由参加時間になると、私は英語の授業を見に行きました。生徒たちが電子辞書をめぐって、英語で話し合いました。賛成か、反対か、激しく討論しました。久しぶりの高校の雰囲気ですね。私は感心しました。

英語授業の後、私は母親のような女性と教室の外で巡り合いました。私たちは立ったままで、30 分ぐらい話し合いました。今日はわざわざ来て、娘さんが学校でどんな様子かを見に来たようです。びっくりしたのは、私が彼女のご主人さんと同じ名字を持ちます。多分古代で先祖が同じかもしれないです。韓国人の中に、「劉」という名字があるのが、私は初

めて聞きまして、本当にびっくりしました。「君は何で日本の国籍に変わらない」と聞かれたら、彼女はすぐ答えくれました。「これが私の自慢ですよ。」その瞬間、彼女のプライドを持つ顔から、「民族意識」ということを感じ取ることができます。どこに移住しても、民族の印が血統の流れにとともに残されます。その時、私も自分の民族のことを自慢しました。

見学中に朝鮮語、日本語、英語と言う三つの言語を耳にしてびっくりしました。特に、体育の授業で先生は子供たちと話している時に、日本語と朝鮮語同時に使っていた時は理由が気になりました。実は、この子供たちは日本で生まれたから母語で話すチャンスが少なくて日本語を使うようになったそうです。他の国で生まれて、毎日その国の言葉で話していて、または母国の文化を知らずに違う国の文化に慣れてきていたこの子供たちには、今学校で「はい、朝鮮は母国です。朝鮮語を勉強しましょう！」と言われたこの子供たちには世界はどのように見えるだろうと考えずにいられませんでした。そもそもアイデンティティと言うのを生まれた国かそれとも静脈に流れている血かどちらが決めると言う事も考えさせられました。この子供たちは何年間たっても、多分 2 つの国の間で挟まっているままで、自分のアイデンティティを探し続けると思っていました。日本人の立場から見ると朝鮮人、朝鮮人から見ると日本で住んでいるから同化されたように見えるのは簡単に変わらない事実だと思います。

どこにいても、どの国籍を持っていても個性と自分の色を失わないで生きていけるのを心の底から望んでいます。

留学生センター主催講演会「ロヒンギャ難民の今」

2018 年 11 月 28 日（水）　14:30~16:30　N313

「ロヒンギャ難民の歴史」長谷川健一、長谷川留理華

「ロヒンギャ難民の現状」アウンティン

参加者：　29 名（学芸大教員７、学芸大学生 11、他大学学生５、高校生１、小金井市議 1、一般４）

参加者の感想文

「深刻な事態に驚いています。日本政府のあいまいな態度をただして、ロヒンギャの人権が回復されるように、しなければならないと思います。特に入管法改正は今国会の問題になっているところとは別に、きちんとした国内のロヒンギャの人びとの生活が守られないとと思います。」

「今日非常に大事な話題について少しでも知れてよかったと思います。短い時間で本当に少しだけわかってきても、ロヒンギャの差別のことはあまり知られていないようですので、

こういうセミナーが必要だと思いました。」
「ロヒンギャ難民について色々な問題がある。ロヒンギャ難民がいる国はいろいろな社会問題を解決することが困っていると思う。この講演会はました。ミャンマーのロヒンギャ難民と Rohingya Genoseide について述べたけど、その問題の解決方法をもっと聞きたい。」
「日本が国際支援をする時、資金援助や住居／学校建設という形をとるが、そういった実質的な支援ではなく、もっと根本の国籍、人権、アイデンティティを 1 番に求めているということを自覚しなければ本当の支援にはならないと感じた。またこの問題は新聞の一ページを飾るものでも、国同士の関係に利用するものでもなく、刻一刻と進むものであり、一秒たりともゆっくりしてはいられないと感じた。差別をする加害者が、政府／軍／警察であることに驚きを感じたし、あまり自覚がなかったが、あのユダヤ虐殺と同じことがこの時代にも起きているということの深刻さに気づいた。」
「民族差別から始まり、宗教差別につながる虐殺、同じ人間であっても同じ目でみてもらえない悔しさが今日の講演で伝わりました。私が母国で受けた歴史の勉強ではミャンマー国内（一方的）戦争と難民については聞いたことがありますが、やはり外国で言われているバージョンではかなりの差があると思います。」
「ミャンマーの文化や歴史を考えてもらってありがとうございました。ロヒンギャ難民のこと今まで聞いたことがありませんから、面白かったです。それから、難民の問題は世界中大切なことだと思います。そして分かりやすくて、ロヒンギャ難民の問題は私が考えさせて、「どうすればいいな」って。自分の人生はよくても貧しくて弱い人々を助けることを忘れないようにみんなでがんばりたいと思います。知らないことが多かったですから、参考になりました。」
「私の周りの人間（普通の人びと）は、このニュース、問題を見ると必ず「なぜ？」という質問が出ます。この「なぜ」が理解できずにもやもやの部分が多くそのまま終っています。今後の活動のためにも、「なぜ」このようなことが行われているのかを知りたいと思いました。」
「ロヒンギャ難民問題と虐殺のことははじめてこちらで聞きました。ロヒンギャはこんなにひどい目に合っている同時に私たちは同じ地球にいても何も知らず、知っていても目を閉じて何もなかったように生活を送っています。この世界は間違っていると思います。人間として恥ずかしいです。」
「ロヒンギャ難民の問題をまずは身近な人に広めて少しでも多くの人に知ってもらえるよう、私自身も協力したいと思いました。貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。」
「ごく短い期間で発生したロヒンギャ差別の歴史についての過程が興味深かった。（薄暗く、長谷川留理華さんの口調が暗かったのが少し気になった。）アウンティンさんが、何度も「私たちはみなこの世界の一員」と語っていたことがとても印象的であった。私たち日本人は世界で起きていることに対してあまりに無関心・無知であると感じた。」

「このような開いた講演会は重要と思います。ぜひ継続して宣伝して開いていただきたいと思います。」
「人間は、戦争より平和の方が教えたら、このような問題がないと思っています。」
「この問題は長い時間続けています。早くこの問題が終わりたいと思います。ロヒンギャ難民の問題を語ってくれて、どうもありがとうございました。」
「ロヒンギャという民族の存在さえ知らなったので、そんな大変なことにもあわせているのを見てとても残念だと思っていました。がんばれ！」
「自分の国の政府や民族に差別されるのはとても悲しく、苦しいことだと思う。ロヒンギャのことを何も知らなかったので勉強になりました。私は何かできるかわからないけど、まずいろいろな人がロヒンギャのこと知ったらいいと思う。帰国後、自分の大学の人などにロヒンギャについて話したいと思う。」
「本日、ロヒンギャの方々についての情報（背景、現在の状態や問題）を教えていただき、どうもありがとうという感じがしました。困っている人を助けるのは私たち人間がすべきであることじゃないでしょうかという話題はとてもいいと思います。そして、人間はみんな平等でこの世に生きることは当たり前じゃないんでしょうか。とてもいいセミナーになりました。」

第３回　東京学芸大学ヒューマンライブラリー

日時･場所：2018 年 12 月 16 日（日）12 時受付開始（N 棟 3F）
対話時間：12:45 から 30 分ごとに、15 分休憩、全 5 回
全体交流会：16:30-17:30
「本」のタイトル一覧

作者名	カテゴリー	タイトル
長谷川留理華	ロヒンギャ	迫害にもいじめにも負けないから今ママになれた
アミール	ムスリム留学生	イスラム教・ムスリムとは何か
みなみ　みち＆アイリーン	日本語教室／外国人支援	小さい日本語教室から見えた日本に住む外国人の悲喜こもごも
万里	X ジェンダー	『Ｘジェンダー』男寄り中性の場合
ゆうと	ゲイ	教室だけじゃない～とあるゲイの先生の話～
畑野とまと	トランスジェンダー	トランスジェンダー活動家です♪
Hillary	発達障害 LGBT ダブルマイノリティ	第一話：[有名国立大学大学院生×学習障害]＋[トップアスリート×運動障害]＝ 第二話：[身体性は男性、性自認は女性のトランスジェンダー]＋[レズビアン]＝
山口　通	視覚障害	障碍から「障生（しょうせい）」へ
堀口　昂誉	ろう者、手話	日本の超少数民族？～ろう文化～
やすよ＆きま	双極性障害、ADHD	持ちつ持たれつ～アクセル＆ブレーキの関係
小山祐介（コヤ）	鬱（うつ）	どんな生き方もあっていい～うつで悪いか～
こばやしたくや	児童発達支援	学校/園を外から支える
瀬川　知孝	学校外の教育支援	教育と福祉の真ん中で働くーユースワークとは何か？

受講者の感想文

ヒューマンライブラリは初体験でしたので、とても行ってよかったと思います。しかも、最初のイメージとまったく違いました。なぜかというと、ゲストスピーカーと直接話せたり、質問聞いたりすることができて、非常に親しい感じがしたからです。私が参加したのは瀬川知孝さんのユースワークについて、ヒラリーさんの障碍者を持っている子供のための教育について、万里さんのエクスジェンダーについて、畑野とまとさんのトランスジェンダーについて、そしてゆうとさんのゲイの先生についての本でした。

一番思い出に残っているのは万里さんと畑野とまとさんの本です。日本であまりできないフランクな話していただいて、日本の LGBT コミュニティの実存のことがいろいろ解ってきました。スウェーデンでは自分のセクシュアリティかジェンダーを異常だから隠していると言う人が少ないと思います。特にセクシュアリティについてはほとんど皆はオープンにしています。

しかし、ゆうとさんの話を聴いたら、「スウェーデンは違うでしょう」と思ったのに、結局私の先生方々の中にゲイでオープンでいたことがないのです。絶対に誰かは LGBT に関る方だったはずなのに、知りません。もちろん、先生はそういうプライベートなことをあまり生徒たちの前に言いませんが、こういう話をすると生徒たちの前に言ったほうがいい気がします。なぜなら、生徒が自分もそうかもしれないと思ったら、近くにいる先生と話せることが大事と言うことです。

やはり、仲間がいると言うのは一番大切なので、ヒューマンライブラリなどのようなイベントも大切にしようと思いました。日本の一つの難しいところといえば、自由に話せない場合は多すぎると思います。建前と本音の文化の中に、どうやって自分の異常なところを見せたらいいのかとのことは、非常に悩むと思います。もう少し優しい社会を作っていきましょう。

生きている図書館

人間は昔から知識を後世の人たちに伝わるように紙に情報を記述して、本を作りました。知識を学んだり、情報を調べたり、便利にできるように貴重な本が集まる「図書館」が生まれました。それで、「図書館」というのは普通に「本でいっぱいところ」というイメージがします。しかし、この前は、「ヒューマン・ライブラリー」という活動を耳に入ってきました。それはなんでしょうか…

2018 年 12 月 16 日（日）に「ヒューマン・ライブラリー」活動を参加しました。私にとって、「ヒューマン・ライブラリー」とは、本の代わりに人間をデータベースとして人間の経験から知識あるいは情報を学ぶことです。その説明を考えてみれば、「人間の経験から学ぶ」ことは人間の最初の習得し方と同じと言えます。それに、ゲストの経験からの情

報も本に書いてないことで、面白いと思います。

今回「瀬川知孝さん」「Hillary さん」「みち&アイリンさん」「畑野とまとさん」「ゆうとさん」という 5 人のゲストから話を聞きました。

「瀬川知孝さん」は、先生になった時にある学生が学校行きたくなくて、辛く過ごすのを見て、「中学生と高校生の居場所」を行い始めたそうです。瀬川知孝さんの話から日本の教育問題やそれらの問題の解決や色々な役に立つ活動についてのことを学びました。次に、「Hillary さん」の話を聞きました。「Hillary さん」は趣味としてマラソンに参加する体が弱い人で、学習障害を持っているが、大学院を卒業した人だそうです。Hillary さんの話から、最後まで頑張ればなんとなく成功になる点で、体より心が大切だと学びました。

それから、外国人に日本語を教える日本語学校から来た「みち&アイリンさん」の話を聞きました。「アイリンさん」は日本人と結婚しているフィリピン人です。アイリンさんから異文化の点も言語の点も日本でつらく生活する経験が分かりました。自分も外国人でアイリンさんの気持ちがよく分かって仲良くなりました。そして、LGBT を認めない日本社会の中で生活しているトランスジェンダーの「畑野とまとさん」から世界の LGBT の情報ととまとさんの性転換プロセスの経験を学びました。最後に、ゲイで、高校の社会の先生の「ゆうとさん」の話を聞きました。「ゆうとさん」は LGBT の学生たちや性別に関する問題がある学生たちの相談役として相談に乗ったり、LGBT についてを正しく分かるように活動を行ったりしています。

ゲストの話は本の内容のようだと見られています。それぞれの人は違う環境に存在していて、違う経験を持ちます。そして、それぞれに人はそれぞれの本みたいだと思います。

人を人として見る、ユートピアなのか

ゲイ、トランスジェンダー、X ジェンダー。12 月のヒューマンライブラリーで数え切れない問いを立てたいくつかの言葉。なぜ自分であることは問題なのか。なぜ自分を受け入れるために時間がかかるのか。そもそもわからないから時間がかかるのか。自然なことをなぜ知らないのか。まるで、無限に問いを呼ぶ問い。まだ何も理解ができていない世界なんだと思える、そして、その世界の一人として私はどんな努力をしているのか。さらに自分の存在も疑問に思う。

LGBT に関する「本」を最初に“読んだ”のは、**ゆうとさんの***教室だけじゃない～とあるゲイの先生の話。*教室の中には一人以上はいる LGBT の子供、その割合はよく言われるかもしれないが、職員室、オフィスや病院などの中では言われていないとゆうとさんは語っていた。それを聞き、とても大きな違和感を感じた。ブラジルでは性差別に関わる暴力は日本よりよっぽど多いはずなのに、職場先ではカミングアウトする割合は、それら

の（暴力的の）差別が少ない日本と比べると多いと気がしたからです。

万里さんととまとさんのお話を聞いてからも、日本ではやはり違っている人は変にみられ、手を上げなくても、見下された視線が十分傷ついたり、日本社会のフォーマットに合わなければいけない社会だと思いました。

でもそれ以上に彼らは精神的に強くて、自分のアイデンティティを誇りに思い、顔を下げないで、前を向いている力があるとも思いました、そして LGBT に次ぐ 13 の字は余計ではなく、自分がまだ何かわからない人が自分を見つかるためにあるんだと理解しました。マジョリティでもマイノリティに当てはまるんではなく、自分のアイデンティティを知ることだと。

だが、日本社会だけではなく、世界的に人間の性格から人を知るのは少ないが、その日は訪れるのか。それともユートピアなのか。ジェンダーや、色、宗教も関係なく人と接することができて、差別のない世界は来るのはないかもしれないが、それに向かい、ここで気付いたことを、どこにでも伝えるのがヒューマンライブラリーに参加した方々の役目ではないか。良い本を読むと、宣伝するのが自然。

最終レポート集

「不登校の在日外国人子供への教育支援に関する研究」

第Ⅰ部

・テーマを選んだ動機

私が選んだテーマは「不登校の在日外国人子供への教育支援に関する研究」だ。主には教育支援の立場から、不登校の外国人の子供へどのような支援を提供するのかを検討することだ。このテーマを選んだ理由以下のようなものだ。

経済グロバール化と少子高齢化によって、日本に移住する外国人がどんどん増えっている。それに伴い、在日外国人の子供も増加している。こういう背景で、日本の小中学校に在籍している外国人子供が学校で不適応などの理由で不登校になることが少ない。しかし、日本における不就学・不登校児童への教育支援に関する研究はほぼ日本人の児童生徒を中心にして検討している。外国人の児童生徒の不就学・不登校の問題についての研究はあまり見えない。それで、将来は、博士後期までに進学するのを目指しているので、前の人がやってない研究をやりたいと思い、このテーマを選んだ。これは一つの理由だ。

もう一つは、自分は外国人だ。研究をやる時には、研究分野に関する専門知識だけでは足りない、研究者自身の生活経験も大事だ。自身の経験と専門知識のもとで有意義な研究を作り出したい私にとって、外国人の子供とつながる内容を研究したいと考えた。以上で、私はこのテーマ「不登校の在日外国人子供への教育支援に関する研究」を選択した。

・発表の概要

前回の発表は主に以下の二点を説明した。一つは問題背景で、もう一つは先行研究のまとめだった。 前に述べたのように、日本の学校に在籍している外国人子供の不登校問題は在日外国人の増加にっよて生じる。在日外国人の増加の理由は「経済経済グローバル化」と「日本の少子高齢化と労働人口不足」だと考えられている。

まず、経済グローバル化により、人口流動方向が大きく変化した。１９６０年から、発展途上国から、発達国に移住する人口数が増えている。 そして、日本の少子高齢化と労働人口不足の影響で、日本に移住する外国人が増えつつある。法務省により、2017 年 6 月末まで、日本に在留外国人が 2017 年 247 万人に達して、過去最高を記録していることを明らかとなった。 在日外国人の増加に伴い、外国人子ども人数も増加している。法務省在留外国人統計により、日本の在留外国人の中、外国人子供数（0-19）は 2011 年から増加している傾向が見られる。2017 年 6 月まで外国人子供数（0-19）は 425448 に達して、その中で、学齢期（6-15）の外国人子供数は 177274 で、過去最高である。このままの流れで、今後外国人児童生徒数の増加が予想される。 以上は発表の問題背景だ。

それを除いて、私は外国人子供の不登校と学校不適応に関する論文をいくつか読んだ。それらの中から、以下のようにまとめた。 先行研究と新聞記事により、不登校の外国人の子供たちは一般的に以下のような特徴を持っている。まずは１「日本語指導の充実が要望

している。」ということだ。文部科学省の「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査平成 28 年」により、平成 28 年公立学校に在籍している外国人児童生徒の中で、日本語指導が必要な外国籍児童生徒数は 34335 人、同年の在籍している外国人児童生徒数の約 42%に占める。公立学校で日本語指導が必要な日本籍児童生徒数は平成 18 年から増加している。それで、外国籍の子供だけでなく、外国にツールをもつ子供たちに対しての日本語指導が求められることを明らかにする。そして、２不登校の状態が深刻化・長期化している事例の児童生徒では、学校や学業に関する支援のニーズが語られず、遊びやお金の話が中心であった。不登校の長期化とともに、親子の学校離れが進むという実態が明らかになった。３帰国希望について親子で齟齬がある事例では、支援ニーズが親子で異なっていた。４いじめなどの学校内でのトラブルや不登校初期には、学校側は家庭と連携して、対応を試みたが、言語の問題や文化差などで奏功しなかった。不登校の長期化にはさまざまな悪化要因が関連するが、ブラジル人の場合には、一旦不登校状態になると親子間の認識のずれや学校離れが深刻化しやすいことが示唆された。
不登校の要因については、以下のようなものだ。
１学校と保護者間の非連携。
２学校で居場所がない。子どもが言葉の壁で、友達を作りにくい、クラスで所属感がない。そして、いじめに遭う子どもいる。
３いじめとその放置。
４文化や家庭環境の違い
a 家事や内職、親のために通訳をして、学校を休む。
b 兄弟の面倒を見る
親が頻繁に仕事を休むと解雇可能性がある。母子家庭で他に支える者がない場合、生活費を稼ぐために、親の役割を取る。

５親の労働について、不登校児の親の多くは非正規雇用で、保護者の労働環境も子どもたちの学校生活に大きく影響している。

以上のことを通して、不登校の外国人子供の要支援のニーズは存在していると分かれる。しかしながら、日本における不登校の外国人子供の実態が分からず、現時点では、解決策が作り出せない。現時点では、外国にツールを持つ子供たち向けの日本語指導があるけど、それだけでまだ不足だ。不登校の外国人子供の全体像を把握するための努力も必要だと思う。そして、実態を把握するうえで、外国人子供向けの支援体制の構築と教育現場で異文化対応能力を持つ教育者と教育支援者の配置も今後教育支援の領域で大事な課題だと考える。
・発表の振り返
前回の発表会で皆さんから大変貴重な意見を頂いた。皆さんのコメントにより、私の発表

の問題点は主に以下の２点だ。１聞き手を意識しなかった。アイコンタクトが不足だった。２不登校の外国人子供をテーマにしているが。具体的なデータが示さなかった。１について、今後はちゃんと練習して、できるだけ改善する。２については、不登校の外国人子供に関する具体的なデータは、国レベルとは言えない、地域レベルまでもない。今年の四月以降、大学院に進学して、これから、学校現場に行って、現地調査を行うつもりを持っている。

第二部

・授業全体の感想

今学期の授業を通して、自分の目が広げた。大学時代で、私はいつも固定的な視点で物事を考える。なぜ相手はこう考えているのか全然わからない。異文化とコミュニケーションを通して、私は自分と違い民族、違い文化に出会えて、自分が理解していないことを分かれた。各国から来たの方との交流を通して、違う文化と接触して、理解できた。初めて違う文化に会って、不理解の感じがあるのはよくあることが、不理解のことに対して、怖くない、尊重する気持ちを持つべきだと思う。それで、日本語力だけでなく、自分の異文化に対しての理解力も高めた。

・不十分だったこと

日本の文化を理解し、日本語力を高めるために、日本人の学生たちと交流したいという気持ちをもって、今学期は異文化とコミュニケーションを選んだ。でも今学期の授業では、日本人の学生は多くなかったから、少し残念だと思った。そして、今学期では、異文化とコミュニケーションの授業で二回しか発表しなっかた。もし発表の機会が増えていただければいいと思う。発表をきっかけに、授業または授業に関する課題についての思いを皆さんに伝えたいと思って、違う国の方達の考えも聞いていただきたい。もっと深く交流したいと思う。

以上は私の報告だ。今学期岡先生の指導を受けてくださいまして。感謝の気持ちを持っている。これからも、異文化間の理解を無上するために努力したいと思う。

最終レポート

「マイノリティと言語教育」

1. このテーマを選んだ理由

このテーマを選んだ理由は、私の育ったオーストラリアでは、マイノリティの言語がなくなっていることが重大な問題であるのにも関わらず、このような問題について人々が普段あまり話題に出さないからです。そのため、自分も自分の国のことですが、あまり詳しいことは知らなかったので、オーストラリアのマイノリティについて調べたいと思いました。今回は問題となっているマイノリティ民族について学び、どうしてこの問題が起きている

のかまた解決するための方法をみつけたいと思いました。

2. 発表内容

影澤桃子さんと『マイノリティの言語』について発表しました。

影澤さんはカナダのマイノリティ民族の言語が消えつつあるという話をしました。カナダでは様々な文化的背景をもった移民の数が増えており、バイリンガル教育が進んでいることが問題になっています。私たちのプレゼンテーションの分け方は影澤桃子さんが移民が急激に増えた影響で生じた、バイリンガル教育の必要性と二重国籍家族のあり方について説明し、一方で私は国家の中での原住民の立ち位置や言語教育の問題について説明しました。私たちのテーマは、バイリンガル教育と言語の教育を推進することで得られる効果が、マイノリティにある人々にとっても住みやすい多文化社会作りの役に立つかというリサーチクエスチョンを元に決めました。

私は、このプレゼンテーションでマイノリティの言語がなくなっているという具体的な例を挙げて発表しました。マイノリティの言語が少なくなっているという問題が世界中で起きています。世界には７０００もの異なる言語が存在していますが、ある研究によると、今世紀の終わりまでに、その９０％が使われなくなるそうです。なぜなら、急速にグローバル化が進んで、人々は関わりをもつようになって、共通の言語を話すようになったからです。特に問題が深刻な国に注目するのが、一番分かりやすいと思ったので、オーストラリアを例に挙げました。

実は現在オーストラリアでも、たくさんの言語が使われなくなってきています。下の図は、１８世紀後半にオーストラリアに存在していた、原住民アボリジニの異なる部族を表した図です。この図によると、白人による植民地化が始まる前までは、オーストラリアには３００～６００もの部族がいたとされています。そして、２００～３００もの異なる言語が使われていましたことがわかります。（図１）

（図１）

しかし、植民地化のあと、１９６０年代後半まで、子供たちは学校で自分の部族の言語を話すことは禁止されていたのです。そのため、子供達は自分のアイデンティティを失い、学校に行かない子どもや非行に走る子どもたちが出始めました。そして、仕事に就けない子ども達が増えて、今でもアボリジニのコミュニティは貧しい人が多いことが問題になっています。２０１５年から２０１６年にかけて、アボリジニの子供たち（１７歳以下）が児童保護の手当を、アボリジニではない子供の７倍も受けています。

次は、マイノリティ言語教育で成功しているところを挙げたいと思います。
それはニュージーランドです。ニュージーランドはオーストラリアと同様に、現在英語が公用語ですが、もともとマオリ語という言語が国内で使われていました。オーストラリアでは多くの先住民族の言語がなくなりましたが、ここ数十年間ニュージーランド政府は、マオリ語を自国の社会と文化に取り込むための政策を行っています。例を挙げると、近年ニュージーランドの小学校では、全生徒が「マオリ語」を学ぶカリキュラムが作られようとしています。ニュージーランドの現大統領は、バイリンガル教育を積極的にすすめていて、なんとマオリ語の授業を義務化を目指しています。現在では、2014 年までに１００万人がマオリ語を話せるようになることが目標です。このバイリンガル教育は、多くのニュージーランド市民が、お互いのアイデンティティーを尊重しながら、共存していくために重要な役割を果たしています。

3．振り返り
発表し終わった後で、質疑応答では色んな反応がありました。その質問の中で、ある生徒が「ニュージーランドでマオリ語の教育を支援しているので、日常的にマオリ語が目にはいりますか？例えば広告など」という質問がありました。その質問に答えながら、私のプ

レゼンテーションのよくなかった点に気が付きました。様々な事実問題や統計は出しましたが、どのようにして先住民族の言語が現代の社会に取りこまれているのかについて話しませんでした。そのため、ニュージーランドの北にある島の南の海岸に位置するワイロアという町を、マオリ語を盛んに取り入れている例として使って発表すればよかったと思います。
この写真はその町にあるマオリ語が書いてある、バイリンガルな標識です。（図２）

（図２）

4.　最終発表評価シートより

● うまくいったこと

・パワーポイントの文字が見やすかった
・使った言葉がわかりやすかった
・自分に関する話だったのがよかった
・身振り手振りがよかった
・声が大きかった
・2 人で協力したのがよかった

● 反省点

・資料が少なかった
・原稿をみすぎていた
・数字やキーワードをパワーポイントに載せるべきだった

私のプレゼンテーションのよかったところと反省点を読んで、改めて振り返りをしました。

私は大きな声でわかりやすく話したが、紙を読んでいたことが多かったし、アイコンタクトが少ないという指摘がありました。今後は、資料がなくても話せるように準備をしっかりして、ちゃんと決められた時間内に発表を行えるようにしたいです。

5. 授業全体の感想・授業で学んだこと・不十分だったこと
今学期は、多文化というテーマに沿って、特にさまざまな地域におけるマイノリティ民族に次いで学びました。私はこの授業を通して、マイノリティ民族が自文化を守ることの大変さやそれに伴う社会の中での問題について初めて知しりました。例えば、沖縄の人々が現在でもアメリカと軍事基地をめぐって戦っていることです。アメリカの基地の移転に反対したり、確実な安全性を求める運動など政治にも訴えかけていることが印象的でした。その熱意を見て、自分の国の原住民族が抱えている問題と似たものを発見し、自分の発表のテーマにも繋がったのでよかったです。

しかし、あまり学べなかった多文化社会の中にあるマジョリティである人々の文化や価値観についてもっと学びたいと思いました。近代の社会では、マジョリティの中にいたら個人のアイデンティティが失われてしまうということも問題です。例を挙げると自分の通っている大学があるドイツでは、第二次世界大戦の経験から、ドイツという国家をナショナリズムをかきたてるような発言は禁止されているそうです。また、インターネットの普及によって世界はグローバル化に向かい、自分が所属するコミュニティとの繋がりが薄くなり、人との直接的なコミュニケーションを取らなくなってきています。このように、マイノリティとマジョリティ両方の視点から学ぶことでバランスよくこの問題を考察できると思いました。

参考文献

・オーストラリア政府、保健省
https://www.aihw.gov.au/reports/australias-welfare/australias-welfare-2017-in-brief/contents/indigenous-australians
・オーストラリアの公共放送局、ニュース記事
https://www.sbs.com.au/news/nz-government-pushes-for-maori-language-in-all-schools-by-2025

多文化社会とコミュニケーション 最終レポート

[発表内容]

私はこの授業における最終発表において、マイノリティのための言語教育についてリサーチを行い、発表をした。このテーマを採択した動機としては、自身が今学期に受講していた他の授業や、所属しているゼミでの学習において、日本にいる外国にルーツを持つ子どもに対する言語教育の支援についての内容に触れる機会が多く、その中で彼らの母語教育、母語保存についての問題に触れたときに、人々の間での関心や問題意識がかなり低く、また自分自身でもその意義や重要性についての理解がまだ不十分であることから、詳しく研究をしてみたいと思ったことである。その後、実際に日本において行われてきた外国人児童を対象とした母語教育の事例についていくつか調べてみたところ、日本はこの分野においては十分な研究活動、また実施するための環境整備、人材育成や確保など、多くの面で後進国であると感じられた。このことと、以前欧米諸国と日本の mipex(移民統合指数)のデータを比較したときに、欧米諸国ではマイノリティのための教育、またマジョリティに対するマイノリティのことを知るための教育への取り組みが日本よりも活発に行われている、ということを他の授業において学んだ経験から、マイノリティへの言語教育において日本よりも進んでいる取り組みをしている国の施策についてリサーチを行うことで、日本で今後マイノリティの言語教育を普及させていくために良いヒントが得られるのではないかと考え、発表のために研究を行うことにした。

類似した内容についてリサーチをしたメンバーとペアワークの形で発表を行ったが、私はカナダにおけるマイノリティへの言語教育プログラムについて調べた。カナダでは、昔からドイツなどのヨーロッパ諸国からの移民が多く住んでいて、最近では中国などアジア諸国からの移民も増えている。そのため、多言語・多文化社会であり、移民への母語教育の必要性についても早くから声があげられた。その代表的な政策として、1977 年に始まったオンタリオ州多文化主義政策の 1 つであるマイノリティ言語教育が挙げられる。主にヨーロッパ諸国からきた移民のニーズに応えて形成され、ウクライナ語、ヘブライ語、ドイツ語などの教育が行われ始めたが、時代の状況によってその内容もフレキシブルに変容し、近年では中国系移民が増加してきているため中国語教育も新たに導入されているという。

注目すべきポイントは、これらのマイノリティ言語教育が「公教育」の中に位置付けられており、その言語を話す地域にルーツを持つ学生だけでなく、すべての生徒に開かれているという点である。また、このほかにも、日本ではマイノリティに対する母語教育というと、一般的に家族間でのコミュニケーションを保てるようにする目的や、アイデンティティ形成・保持などの目的として行われるが、カナダにおいては、”継承語”教育として、自分たちの文化集団の言語・文化・アイデンティティを、親から自分、そして次の世代に”受け継ぐ”ことを目的としている点、また、移民たちの継承語はカナダにおいて「国を豊かにする資源」として捉えられている点も、注目すべきである。カナダが多文化主義をすすめていく上では、多種多様な言語を保存・継承していくことへの重要性はかなり大きく、ま

た、継承語への取り組みは移民だけの問題ではなく、マジョリティも一緒の枠組みに含んだ形で、国家全体で多言語・多文化社会の形成に貢献しようという姿勢が見られているのが大きな特徴である。

上述したポイントは日本ではほとんど見られることのない捉え方・視点であり、発表においても意識して取り上げた。発表を聞いていた学生たちにとっても、多言語・多文化社会の形成・維持を大きく支えている具体的な施策を知れたので面白かったという感想や、内容へのより詳しい部分への質問もたくさんあったので、ユニークな形で効果的な問題提起ができたのではないかと感じた。ただ、受けた質問やリアクションなどからは、私自身が考え共有したいと思ったマイノリティ言語教育に対する問題意識(なぜ必要なのかということや、メリットなどについて)があまり伝えられていないような印象を受けたので、もう少しはじめの導入の部分で問題提起にもうすこしウエイトを置いてみたり、具体的なケース(母語ができないことで生じるデメリットの事例)などについて触れたりすることがあったらよかったのかもしれないと感じた。また、海外の事例から得たヒントを”日本においてどう取り入れていくか”をもっと述べてほしいというフィードバックを得たので、それについての考察をもう少しわかりやすい形でまとめて、発表の結びとして伝えることができればより効果的だったのではないかと思った。

今後の課題としては、カナダにおける継承語教育は主にオールドカマーの人たちの声によって形成されてきたが、今後もニューカマーは増えていくし、移民のエスニシティもどんどん多種多様になっていくから、それに対応していくためには、既存の政策だけでなく、新たにプランを考えていくような姿勢が必要ではないかと考える。また、カナダにおいては、移民だけでなく、先住民族(イヌイット)の人々も生活しているが、今回のリサーチでは移民への継承語教育についての情報はたくさん見つけられたものの、先住民族の言語・文化の継承や保存に関する情報は得られなかった。もし今後機会があれば、彼らの言語、文化の継承のための取り組みなどについても調べてみたいと思う。また、今回の研究で得た見識を、今後の日本でのマイノリティへの言語教育を考えていく上で活かし、なんらかの形で貢献していきたいと考える。

[授業を受けての感想]

受講者のほとんどが留学生という、かなり特殊な環境に身を置きながら学習したことは、とても充実した経験になった。とりわけ、授業内でグループワークを行ったり、ディスカッションを行ったりと、アクティビティが多く含まれていたことで、学生たちが意見を述べるスキルや、自分でリサーチを行い発表をするスキルの上達に役立っていたと思う。在学生からの印象としては、それぞれバックグラウンドの異なる留学生たちと意見交換をたくさん行うことができたことによって、自分自身に新たな考え方を取り入れられたと感じる。また、それを継続して行ったことによって、異文化に触れ、それを自分のなかに取り込むことを抵抗なくできる態度が身についたようにも感じた。

授業では、毎回異なるテーマを扱い、資料も様々なものを使っていたので、充実した学習ができていたと感じるが、一つ自分にとって授業を通して十分にできなかったアクティビティはフィールドワークである。何度か行く機会が設けられていたが、授業時間外に行われており、どの日も調整が難しく参加することができなかった。授業のときに行うことができれば、学生によって享受できる学習に差が生まれにくくなるし、より良かったと思う。全体を通して非常に面白い授業で、もしまた機会があればこのような形式の授業を受講したいと思うので、更なるレベルアップに期待したいと思う。

多文化共生社会と在日外国人の母語教育、不安な点

ドイツ、アイルランドのように日本も様々な文化を囲む国になった。観光だけに限らず、より良い人生のために移民する人々は、本国の文化を初めて踏む土地へ持って行く、そして、１つ以上の文化を数える新たな社会が生まれる。すでに住んでいた市民は土地を奪われるという考えもあれば、グローバル化していると思う市民もいる。移民を受け入れやすい側は共感する方たちかもしれないが、自分の国にとってどのような利益をもたらすことができるのかを理解している。逆に受け入れない側は、移民してきた人が仕事を奪う、又は、場の文化を知らないせいで、ふさわしい行動を起こさない、治安を悪化する原因と思われている。

だが、雇用懸念や、文化摩擦、治安懸念などの不安は第一世代の問題であって、年々とたつほど、フランスやアメリカのように、移民からの合計特殊出生率、つまり、一人の女性がある年に出産する数字の平均、本国の女性と比較すると上回るのはそれらの国に限らず、日本にも同じケースに当てはまり、2 世代、3 世代になると、移民の子孫は日本の文化となじみ、一世代の問題は段々と少なくなり、日本の少子高齢化の解決になるとみられる。

安倍内閣（2014 年）は「毎年 20 万人の移民受け入れ本格検討」容認していたが、高度人材の移民を見積もっていたが、その数を実際に起こすことは難しかった。2018 年 7 月 1 日には、法務省入国管理局は日系 4 世の入国の制度を更新した。1 つの条件としては、日本語能力試験の N4 程度の言語力を習得していること、ビザを更新する際には、さらに上の程度に上達していること。もう 1 つは、家族を帯同しないこと。この 2 つの制度を見ると、アジア系の人材を、過去の朝鮮人の日本人かのように、日本のアイデンティティを取り戻せるように思える。

平成 29 年末には、日本国内に 2.561.848 人の外国人を数えていた。平成 19 年からトップ１になる中国は 2017 年には 75 万人を占める。次いで韓国、ベトナム、フィリピンとブラジルの国籍が序列 5 位を並んでいる。合計の 29.20%は永住資格を持っている。永住者以外、特別永住者や、日本人の配偶者等、家族滞在などの資格で日本に住んでいる子孫

(281.420 人)は、日本の教育を受けてどのような反応をして、どのような方法で母国の文化、言語などの知識を得ることができているのか。

関東、中部と近畿に滞在中の外国人は 85.59%。様々な理由で日本を訪れ年々と増加する外国人の数字。労働不足はその１つである、少子高齢化の影響で外国人従業員の採用が近々と増えていく一方。自動車部品工業に限らず、将来的に日本で働けるように「留学生 30 万人計画」など、技能実習生を増やしたり、日系 4 世の入国の許可など、政府は色々な対策を兼ねている。

だが、外国人の数が増えるほど、国際結婚や、国内で外国人同士の結婚など、新たな形の家族が日本に誕生することもあれば、まだ幼いまま在日する子供や、日本で生まれた子供は、国とは違うルーツを持っていて、その子たちはふさわしい教育を受けているのか、育つことができるのか。

多くの外国人を数える３つの地方（関東、中部、近畿）では、外国人用の学校は設立されて、本国認可もされている学校もあるが、日本政府や行政が認可しないように私塾として経営されているため、学費が高く、通学できる子供たちはそれほどに多くはなく、公立学校を選択する両親はいる。そのほかの地方に設立されている学校は数少なく、外国人の家族は公立学校に通わせる以外の選択肢はない。

日本にこれからも在住する予定を持つ家族もあるが、いずれは母国に戻る可能性は０％ではないため、日本で育つ子供たちは、その時が来れば、母語で会話をすることや、文化、行事、風習を理解でき、馴染むことができるのか。外国での育ちについて考えると、いくつかの不安な点が浮かび上がる。

帰国後のトラブル以外のもう 1 つの心配な点は、親の母語を学ばす日本語のみ話せるようになると、両親との会話が成り立つ親子関係が崩れる可能性である。日本の学校を通い始める子供には、校内で使われる言語、表現、お辞儀などは当たり前のことになり、日本文化に慣れていない親には子供と学校の接し方がわからなくなるケースもある。

お茶の水女子大学の検査で行なわれた結果によると、日本に引っ越して公立学校を通う子供たちにとって、もっとも効果的な母語保持と育成は家庭内での言語と文化のふれあいだと。メディアや音楽、母語での会話や、母語の教科書で自習することが、母国で身につけた文化を保ちキープできる。

文化といっても、今学期で何回も口に出した「多文化共生」の意味は実際に何なのか。正しい答えはないかもしれないが、一人一人に当てはまる多文化共生は存在する。日本に滞在している外国人と日本人はともに違う文化を持ちつつ同じ地面の上で同じ空気を吸っている。ともに社会を作っている。外国人は日本の人手不足の穴を埋め、日本は日々グローバル化しているが、外国人の教育について考えてみると、政府の中ではそのテーマはあまり進んでっはいない。

教育以外の問題点は、日本に難民としてきた方たちの滞在資格が下されていないことや、外国の多文化だけではなく、国内的の多文化問題、LGBT＋など、タブーとしている

テーマは少なくはない。1つ1つの問題の対策を考えるのは、もちろん必要であるが、その問題が存在する理由は受け入れられない社会がまだ存在することではないのか。

少子高齢化社会にとって必要なのは、利益をもたらす経済。その経済を造る人材、高度であれ、労働であれ、若者の数が少なくなる限り、外国の人材に頼る以外対策は少ない、それによって合計特殊出生率も回復する可能性は非常に高い。

いつしか日本も移民を受け入れる側だった英仏独北欧のように、移民排出国になりざるえないのが。22 世紀には 3，4 割の日本の人口は中国系、インド系、ブラジル系の日本人になっているのかもしれない。

多文化社会の 1 人である今、留学生前提にハーフであること、日系ブラジル人であること、永住資格を持っていた外国人であることを忘れないで、これからも多文化のメリットとデメリットを考えながら、すべての人々が理解し合えるユートピアの世界に向けてどのような活躍をしていかなければいけないのかを、今学期の多文化共生科目であらためて考えるようになった。

母国のブラジルに存在する多文化問題は、国際的な移民のトラブルは少ないが、国内的の問題が数多く存在する。国の広さの影響で、植民地化されていた当時は、ヨーロッパからいくつかの国の文化が、地方によって埋められて、今になっては同じ国籍だと認めないブラジル人が存在し、単純な不安点は誇張されている。

半分日本の血、他半分はブラジルの血を持つ私は、それぞれの多文化問題を抱えつつ、２つの素敵な文化の間の道を歩みことができる。この機会を利用し、私の一番身近で解決できる問題は何なのかと日々考え、勉強と仕事を重ねながらも一歩一歩を踏み続ける力を高めることができたのはこの授業で得てきた知識のおかげだ。

参考文献

守屋貴司．(2012)．日本企業の留学生などの外国人採用への一考察．日本労働研究雑誌，54(6)，29-36.

丹野清人．(2009)．外国人労働者問題の根源はどこにあるのか．日本労働研究雑誌，587，27-35.

月刊．(2006)．イオ．編集部 『日本の中の外国人学校』(明石書店，2006 年)．

朱晛淑．(2003)．日本語を母語としない児童の母語力と家庭における母語保持：公立小学校に通う韓国人児童を中心に．

古谷，経衡．移民政策の本当の怖さ．iRONNA，2014．https://ironna.jp/article/454．アクセス：2019/2/14.

毎年２０万人の移民受け入れ　政府が本格検討開始．産経ニュース，2014．https://www.sankei.com/politics/news/140313/plt1403130006-n1.html．アクセス：2019/2/14.

多文化コミュニケーション　最終レポート

外国人技能実習制度について

外国人技能実習制度は、開発途中国、地域の労働者を、最長さいちょう５年間日本の機関に受入れ、技能、技術又は知識を修得しゅうとく、習熟しゅうじゅく、熟達じゅくたつさせることにより、当該開発途上国への技能等の移転を図り、国際協力の推進すいしんを行うというものを趣旨としています。

つまり外国の方が日本の企業で働くことにより日本の高い技術を身につけ、その国の発展を担う人を育てる「人づくり」を目的として創設された国際協力のための制度です。来日して企業で働き、技術を磨く事で、日本の製品の品質管理や、製品がどのように生まれているのかを実体験として学ぶことが出来る制度で技能実習生（研修生）達とその母国にとって非常に有益な制度となっています。

しかし、実は、今実習生たちはすごく悪い労働環境に働いています。一日中、休まず、15時間以上ずっと働いているのは日常茶飯事です。そして、会社から給料ももらえられないのは普通のことです。建設業者がベトナム人実習生に対して、暴行を行う動画がネット上で公開されて、話題になったケースのほか、自殺などの事例も少なくない。「これでは奴隷制度ではないですか。」と居酒屋で知り合った中国人実習生から、低賃金や長時間労働の実態を聞き、中国人留学生が驚いていたこともある。このように外部で話をすることで異常な低賃金や劣悪な労働条件が漏れることを恐れてか、外出の制限などを行う事例もある。大量の失踪を発生させている原因には、こうした悪質な受け入れ団体や受け入れ企業の存在がある点も大きな問題だ。

技能実習生自らが手紙を書き、日本の政府機関に訴える動きは、技能実習生をめぐる問題の解決に向けた一つのヒントを与えてくれる。しかし、個人の取り組みには限りもある。技能実習生の権利を保護するより包括的な取り組みが求められるとともに、外国人技能実習制度の抜本的な改革が急務となっている。

受けた質問は、実習生たちは業務または会社を自ら変わられるんですか。

答えは今数多くの実習生は難民申請をしています。もし難民にならなかったら、自分働いている場所とやっている作業は変わられないです。もし成功に難民になったら、一時的に日本国民のように扱われて、どんな仕事をしたくても、自分の自由で決めます。

■私は前半の発表は「日中平和友好条約締結 40 周年に日本人に言いたいこと」です。

私は南京の出身です。みんなは南京について思い出されることは何でしょう。いわずと知

れた南京大虐殺です。１９３７年１２月、南京が日本軍に占領されて、約２ヶ月の間に３０万同胞の命が一瞬に失われました。その後、人々は戦争の残酷さを肌で知って、古都南京は重い雰囲気に包まれました。たとえ日中平和友好条約が締結されても、市民は悲しみから立ち直ることはできなかったんです。南京の人々にとって「日中友好」ということばは、ただ虚しく響くだけでした。
そんな残酷な体験をしたお年寄りたちは、家族が殺された場面を思い出すたびに、涙を流されたことでしょう。「絶対に許すことはできない」。彼らの独り言が聞こえてきそうであります。私はあの戦争体験していないが、お年寄りの重い気持ちがわかります。
しかし、２１世紀に入って１８年間、中日交流が盛んになるにつれて、私は南京人の一人として、複雑な気持ちになることがあります。「日本とどのように向き合えばよいのか」。私はずっと悩んでいます。
一方日本では「南京の人々は日本人が大嫌いだ」という噂が広がっています。このため南京を訪れる日本人観光客数は、中国のどの町よりも少ないです。
一昨年の１２月、私は南京大虐殺記念館を訪問しました。記念館の奥に入れば入るほど、気持ちが重くなりました。「こんな記念館に日本人がいるはずがない」と思っていると、突然日本語の声が聞こえてきました。目の前には日本からのお年寄りたちがいました。とても不思議な場面に思われました。
彼らは遺影向かって、長く丁重に黙祷しました。代表と思われる男性が花をささげた後、静かに土下座をしました。記念館の他の訪問者は、静かにその場面を見つめていました。その光景を見て私は、日本人観がすっかり変わったことに気づきました。彼らは国の誤った行為を認め、先祖たちに代わって南京を訪問しました。私がその時、言いたかったことは「国の誤りを人前で率直に認めることができる国民は立派である。」
「私たち南京の人々は、日本人と交流したいだけではなく、友達になりたいのです。」これも私が日本人に言いたいことであります。
しかし、前世紀に残され厚い壁を乗り越えることは、生易しくはないです。どちらかが第一歩を踏み出して、友好の手を差し伸べることが大事だと思います。私は南京人として、お互いの誤解を解消し、中日友好のかけ橋になりたい弟子。だからこそ、日本語を専攻したのです。
毎年南京日本人会が南京の玄武湖公園で日中友好活動を主催します。今年の参加者は２００人を上回りました。春の公園はお花見に絶好シーズンで、染井吉野が美しかったです。桜の木の下に中日の友人たちが集い、みんな気楽に飲み物や寿司を楽しみ、楽しく雑談をして過ごしました。
「何故南京に来たのですか？」と私がお訊ねすると、ある横浜出身の初老の方が答えてくれました。
「私は南京に十年ほど住んでいるよ。最初は南京の人は日本人が嫌いだという噂を聞いて、外出するときは日本語をしゃべらなかったね。自分が日本人と悟られることを避けたかっ

たのさ」
「でも、最近は、中国人の心の広さに気づいた。南京の皆さんは日本人の私が嫌いではない。それどころか、不自由だろうからとあれこれ手伝ってくれて、本当にありがたいと思うよ」
「このきれいな町に暮らして、親切な南京の人たちに囲まれて、幸せだと思っている」
この言葉を思い出すと、私は今、もの思いに耽っています。中日平和友好条約締結後、４０年が過ぎました。しかし、両国間にはまだ溝が残されています。日本語を勉強する私は、誇り高い南京人の一人として、中国人の本当の心を日本人に知らせたいです。そして、日本の本当の姿を中国人に知ってもらいたいです。中日のかけ橋を目指して、永遠の平和を願っているのです。これも私が南京の人として日本人に言いたいことであります。
発表の後受けた質問は今中国の歴史の授業で、どのように日本のこと子供に教えますか。答えは、真実だけを教えます。歴史上何が本当に起きれば、子供たちに教えます。別に反日についての教育を行っていません。

■授業で学んだこと：日本人学生と留学生たち一緒に学び、
交流しながら、お互いに理解できるようになりました。それに、日本語で喋るのは自信が持つようになり、コミュニケーション能力も一段アップしました。授業を受ける前に、日本語で喋ることは全然できなかったんですが、この授業と先生の熱心なご指導のおかげで、コミュニケーション能力もだんだん上手になりました。
それに、授業で日本語を学ぶことだけだはなくて、難民問題、在日外国人問題、沖縄基地問題など、いろいろな課題に真剣に考え始めまして、自分の視野も広がります。今まで触れなかったことにも興味を持つようになりました。これからも多文化について引き続き考えております。

外国人介護士、看護師日本語能力養成ためのやさしい日本語対応

１背景

１．１在日外国人看護師、介護士の受け入れ現状

日本社会において少子高齢化が進み、看護・介護分野での人手不足が深刻となる。「第七次看護職員需給見通し」（厚生労働省、2010a）では、不足する看護師が 2011 年の 140 万 4 千人から、 2015 年には 150 万 1 千人へ増加すると予測されている。一方で介護現場においても、入浴介助、排泄 介助、移乗、移動などの身体的負担、夜勤、低賃金などが原因で離職率が高く、人手不足が深刻となっている。厚生労働省の推計によれば、現在の 140 万人の介護職員は、2025 年までに 90 万人以上が必要だと報告されている（読売新聞、2012）。平成 16 年からの 10 年間で、約 40 万人から 60 万人程度の職員の確保が必要だと報告される。

１．２在日外国人看護師、介護士の日本語現状

異文化滞在者である候補生の異文化適応問題が予測されるが、これまでの候補生に関する報告には、国家試験対策、日本語学習の現状に関する問題の反応が多いそうだ。

１．２．１勉強すべき日本語内容多すぎて、混乱である

在日外国人看護師、介護士らは、以下の３種類の日本語を学習・習得する必要が有ることになる。

① 生活の日本語：話し言葉が中心。住所や名前を書いたり、看板や書類等日常的に接する日本語を読むことも含む。
② 業務の日本語：話し言葉が中心。看護・介護記録など、業務上の文書を読み書きすることや、国家試験の学習のために専門学校などの講義を聞くことも含む。
③ 国家試験の日本語：国家試験の読解。

上野（2012）は、インドネシア人候補生への日本語習得に関する実態を明らかにし、候補生の混乱するカテゴリーを、専門用語、待遇表現、方言、聞き取りなどに分類している。専門用語では、母国語では理解していても、日本語での専門用語が分からないことが混乱を招く。

１．２．２介護現場に出てくる日本語問題

厚生労働省（2010ｂ）の看護師候補生への 実態調査では、「スタッフとのコミュニケーション」、「高齢患者への 86%が利用者やスタッフの会話を、「時々分からない」と困難に感じていた。 介護士候補生への実態調査（厚生労働省、2010c）では、約 67%の候補生が日本語専門家やボランティ アの個人指導を受け学習していたにも関らず、候補生の約 90%が利用者やスタッフの会話を、「時々分からない」と困難に感じていた。 日本人スタッフが早口で話すときもあり、候補生が「ゆっくり話して」と伝えるが、現場の忙しさなどがあり、対応できない時もあると報告されている。

１．２．３看護師国家試験をめぐる問題

2009 年度の看護師国家試験受験初回は、2008 年に来日したインドネシア人候補生第一陣が受験したが、合格者は 0 名であった（朝日新聞、2010a)。2010 年度は 3 名（1.2%)、2011 年度は 16 名（4%）が合格している（厚生労働省、2011b)。2012 年度はイ ンドネシア人とフィリピン人の計 415 名が受験し、47 名が合格している。その中には、2008 年度に来日した後、1 年間の延長を希望した 27 名が受験し、8 名が合格している。また帰国後に再来日して受 験した 4 名がおり、1 名が合格となった。2012 年度の看護師候補生全体の合格率は 11.3％であり、昨年度に比べ大幅に上昇したものの、全体の合格率 90.1％と比較すれば合格率の低さが伺える。(朝日新聞 2012ｂ)。

１．２．４看護師、介護士必要な優しい日本語

高齢者、患者の自信や自尊心に対する言語の優しさは看護師、介護士にとって、基本の

責任で、心がけが必要だと思われている。コミュニケーション優しさの不足による身心が脆い患者・利用者とのトラブルにつながる可能性がある。些細な配慮不足のミスでも、患者・利用者の生命の危険性を招き、候補生・職場スタッフのストレスともなりかねない。さらに、配慮的なコミュニケーションが成り立たなければ、患者・利用者のニーズに即した質の高いケアを提供することもできない。

２問題解決

２．１やさしい日本語

「やさしい」という言葉は、二つの書き方がある。「難しい」との対比で、「易しい」で書ける。簡単で、習得しやすい日本語表現だ。「怖い」、「冷たい」、「厳しい」、「きつい」などとの対比、「優しい」でも書ける。対人的コミュニケーションは情けや思いやりに富みながら、円滑なコミュニケーションを行えることを目指す。

２．２易しい日本語から考える外国人看護師、介護士の日本語教育応対

２．２．１適応的な教材

聖隷福祉事業団が作成した 2011 年に発行した『やさしい日本語版　介護福祉士　新カリキュラム　学習ワークブック』である。このワークブックは、川村よし子氏を中心に、旧日本語能力試験３級までの基本語彙を加えて、介護福祉士国家試験に頻出する８０８の専門語彙を使用して、介護福祉士のカリキュラムに準じた教材をすべて「やさしい日本語」を用いて書き換えたものである。

小原はか（2013）の『やさしい解説付き看護師国家試験対策テキスト』は、看護師国家試験の過去問題の問題集に、わかりやすい日本語による解説をつけたものである。

２．２．２国家試験の日本語の簡略化へ向けて

このような合格者の少なさへの配慮として、2010 年 8 月に厚生労働省が看護師国家試験の見直し案 を発表した。見直し案の概要は、「難解な用語の平易な用語への置き換え」、「難解な漢字への対応」、「あいまいな表現の明確な表現への置き換え」、「かたい表現の柔らかい表現への置き換え」、「複合語の分解」、「主語・述語・目的語の明示」であり、これらは 2010 年度の第 100 回看護師国家試験から実践されている（厚生労働 2010b）。

２．３優しい日本語から考える外国人看護師、介護士の日本語応対

２．３．１障害がある場合のコミュニケーション

コミュニケーションに支障がある何らかの障害がある高齢者の場合は、その障害に合わせてコミュニケーションをとることが必要だ。

脳卒中の後遺症等で麻痺がある場合、半側空間失認や半側空間無視、同名半盲といった視覚や聴覚にも障害が残ることがある。このような場合には、麻痺側ではなく障害が無い方の側に回り、顔を見せて話しかけて会話することが必要だ。

脳の言語中枢の損傷によって言語機能に障害が現れるのが失語症である場合、聞くことや話すこと、読んだり書いたりすることに支障が出て、言葉を思い出せない、言葉を間違

える、同じ言葉を繰り返す、意味不明なことを言うなどの症状が現れる。失語症の人とは、短く、わかりやすく、ゆっくり話すことが基本で、相手が言いたい言葉が見つからないようなら「はい」や「いいえ」で答えられるように工夫して質問する、言葉だけで分かりにくい場合はジェスチャーや写真などを使うなどが有効だ。

運動性構音の場合、失語症と同じくコミュンニケーションに支障がありますが、脳の言語機能に問題があるのではなく、音声を発生させる筋や神経が損傷して話す機能に障害が起こる。失語症とは異なり、言語知識に問題はなく、聞いていることを理解できるので、文字盤や意思伝達装置の使用、筆談をするなどの方法でコミュニケーションが可能だ。（https://kaigonochishiki.com/communication 介護の知識）

２．３．２自信や自尊心に配慮したコミュニケーション

高齢者は長年の獲得体験に基づいた自信と自尊心を持っています。このことに配慮したコミュニケーションが必要だと思われる。

まず、適切な呼称を使うこと。高齢者に呼びかける、または会話する中でも適切な呼称を使いましょう。以前介護の世界では身内でもない介護者が「おじいちゃん」「おばあちゃん」と呼ぶことがありましたが、これは適切な呼称とはいえない。基本は苗字に「さん」をつけて呼ぶのが一般的だ。本人の希望があれば名前に「さん」付けで呼ぶ場合もある。

また、指示的な言い方できるだけ避ける一方的な指示よりも相手の主体性を強調して質問形での良い方の方が柔らかく感じられる。例えば「立ち上がってください」「着替えてください」と言うより、「立ち上がっていただけますか」「着替えていただけますか」という言い方の方が受け入れやすいと思われる。

更に、親しみと馴れ馴れしさを混同しない。介護者の中には親しみを込めた言い方をしようとすることで、むしろ馴れ馴れしすぎて雑な印象を与えてしまうことがある。例えば「この間言ったじゃないですかぁ～、忘れちゃったんですか～？」などという言い方だ。このような言い方は、介護者が“親しみ”を込めて言っているつもりでも、相手に不快感を与える場合があるので、注意が必要だ。（https://kaigonochishiki.com/communication 介護の知識）

２．３．３不安感や喪失感に配慮したコミュニケーション

高齢者とのコミュニケーションでは、自信や自尊心に配慮すると同時に、不安感や喪失感にも配慮が必要だ。優しく丁寧に話すことはもちろんですが、それ以外にも配慮すべきことがある。

まずは表情。コミュンニケーションは言葉だけでするものではない。特に表情は大切だ。顔をしかめたり忙しそうな表情をしたり、あるいは辛そうな表情というのは相手に気を使わせるだけでなく、拒否的なメッセージになりかねない。やはり基本は笑顔で接すること、これが対人援助の基本だ。

目線や視線も注意すべきだ。介護では目線の高さを合わせて会話するのが基本だ。そのため、中腰の姿勢やしゃがむ等して威圧感を軽減することを心がける。アイコンタクトも大切ですが、ずっと見続けるよりも目を合わせることと逸らせることのバランスをとりましょう。

更には姿勢だ。腕を組んだりポケットに手を入れたりといった姿勢は防御姿勢といって、相手に対して拒否的な印象を与える姿勢なので意識してしないようにしましょう。

（https://kaigonochishiki.com/communication 介護の知識）

２．３．４言葉の選択

高齢者の自信や自尊心に対する配慮として、できるだけ指示的な言い方を避けるということを挙げましたが、特に言葉の選び方についてもう少し具体的に見ていきましょう。

指示的な言葉はできるだけ避けましょう。例えば朝起きた時には「おはようございます、そろそろ起きる時間ですよ。」というより「おはようございます、よく眠れましたか？」、着替えを介助する時には「自分でできるところまで着替えてください。」というより「このお洋服素敵ですね。これに着替えましょうか。」、食事の際には「頑張ってもっと食べてください。」というより「ゆっくり召し上がってくださいね。」等々、工夫してあまり指示的な言い方にならないよう言葉を選びましょう。

プラス志向の表現を心がけましょう。例えば食事が終わった時に「今日は半分しか食べられませんでしたね。」というより「今日は半分食べられましたね。」というように、マイナス志向ではなくプラス志向の表現を心がけましょう。指示されるよりも、プラスに評価された方がやる気が湧くことも多いものだ。

専門用語を避け、分かりやすくする。介護の世界では多くの専門用語が使われている。特に職業として介護をおこなっている場合は専門用語の使用には気をつけたいものだ。ADL、PT、OT、バイタル、経口摂取、常食などなど、素人には理解できない用語もたくさんある。特に利用者や家族と話すときには、できるだけ専門用語を避けてわかりやすい表現を心がけましょう。（https://kaigonochishiki.com/communication 介護の知識）

３結論

本稿は在日外国人看護師、介護士の様々な日本語現象を概観し、概ね２種類の日本語問題は含まれている。一つ目は外国人看護師、介護士が勉強する日本語の難しさであり、二つ目は医療、看護というような特殊な場面での対人的日本語コミュニケーションの困難点である。それらの問題に対応するために、「易しい日本語」と「優しい日本語」という二つの対応が必要だと思われる。「易しい日本語」対応は、教材の選択と看護師国家試験の日本語の簡略化を中心に対応する一方で、「優しい日本語」は現場の対人的コミュニケーションを中心に対応している。外国人介護士、看護師が「やさしい日本語」能力を養成させることを目指している。

４参考文献

http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000000z68f-img/2r9852000000z6df.pdf
（厚生労働省（2010a）第7次看護職員需給見通しに関する報告書）
http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200000005ltf-img/2r985200000005lwb.pdf
（厚生労働省　（2010ｂ）．インドネシア人看護師候補者受入実態調査結果概要）
http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200000054my-img/2r985200000054pa.pdf
（厚生労働省　（2010ｃ）．インドネシア人介護福祉候補者受入実態調査結果概要）
http://www.asahi.com/national/update/0326/TKY201203260245.html
（朝日新聞デジタル（2010ｂ）．EPA で来日の看護師候補、47人合格　昨年比31人増　3月26日）
https://kaigonochishiki.com/communication（介護の知識　介護コミュニケーション）
読売新聞（2012）．日本語の壁　歴然　３月29日朝刊 岡山地方版，13版，3面．
上野美香（2012）．EPA によるインドネシア人介護福祉士候補者の受入れ現場の現状と求められる日本語教育支援：候補者と日本語教師への支援を目指して国際協力研究誌，18，123-1 36.
朝日新聞（2010a）．笑いたいここで　2月 7日朝刊 岡山地方版，10版，34面．

沖縄がメディアで

これは、様々な苦労してきた沖縄と、沖縄民族の戦いは今でも続いているこの間では、「沖縄の事はメディアで一体どういう形で発表されているのか」、という疑問に答えを探し出すための物レポートです。本州からずいぶん遠いところに位置している沖縄に起きている事、それが理由でか分からないが、結構知られないままいる。

しかし、日本の「ハワイ」といえるこの天国のようなところは、どうしてこんなにも大変の状態の中でいるのでしょうか。

第二次世界大戦の後、沖縄に位置されていた米軍基地の事で沖縄では様々な事故が起こってしまいました。オスプレイの窓が子供たちがよく遊ぶところに落ちたり、軍が使っている物が環境に、特に沖縄の真っ青できれいな海を汚したりなど、沖縄の民族に色々と面倒させた事が例えられのではないでしょうか。ですが、現実はこのようでも、私たちが情報がよく裏に隠されている今の社会の中では沖縄の事を観光地方でしか知らないのです。

私が沖縄の事情を日本へ来た２回目の３週間研修旅行の時までは知らなかったのです。今考えると、その時でもどんなに大変なのか、あまり理解できていないかもしれません。今でもまだまだ知らない事がいっぱいで、どんなに調べても新しい事が出つつあって、「私こんなにも知らなかった」しか言えなくなりました。

けれども、最初にこの無知識の事は私にただ自分の勉強不足として見えても、少し考え

るとそうでもなかったかもしれないかと思いました。上の段落でも指していましたが、現代の情報には残念ながら裏と表があるのです。これは、誰かを守るためか、偉い人の言う言葉に従ってするかなどと理由がいっぱいあってされている、とても事実の話です。

「では、他のところから見ればいいではないでしょうか」と甘く考えていても、現実はそう簡単ではないのです。最近情報を得るには、とても早くて、便利である「インターネット」が使われています。インターネットから検索している事についてすぐ調べられて、情報を簡単に手に入れます。しかし、この楽さこそ私たちと本当の情報の間に距離を作ってしまうのです。

インターネットには守らないといけないという「規則」はございません。皆自由に話せて、自分の意見を簡単にネット上に載せられます。つまり、インターネット上は個人意見と溢れています。何か本当か、そうではないか私たちのその時の気分によります。例えば、ある新聞のネットからの記事を読んで、それについて少し調べても情報はあんまりでないと、またはそれに批判している意見、コメントがいっぱいあるという事を気づくと「私の勘違いだったかな」と本当はそうじゃなくても、そう思ってしまいます。

私も沖縄の事を調べているとき、この問題で特に困りました。一つの新聞で書かれている事は、もう一つの新聞ではなかったり、一部の人達が賛成している事に、大勢な人が反対したりなどの事をみて「沖縄実際そんなに厳しくないか」と何度も思ってしまいました。真相はそうでもないという事を心の中で知っていたのに、満足できる情報はネットの中で少なくあって、それに「沖縄が厳めしい状態だ」という感じの記事を見ても、納得出来なかったのです。

昔は情報を得るには百科事典から見るか、疑問の根を自分の目で見に行く事が当然でしたが、世の中はもうその時代をそっくり通しているのです。もう情報はネット上でしか見られていないのです。沖縄もこの毒からの影響で苦しんでいるのではないでしょうかと、私が思っていました。日本だけじゃなく、沖縄の声をもっと広げて、遠くの国まで聞かせるべきでありますが、この大きな「新世界のメディア」という壁のせいで何かしたくても、声を必要なところには届けられないのです。

では、どうするべきか。沖縄の事をどうやって世界に広げられるか。問題の解消は何でしょうか。

言うまでもなく、まず沖縄の事を知ってもらえるようにしないといけないことになっています。これをする時は 24 時間で消されるインスタストーリじゃなくて、長時間残るところに載せないといけません。この方法で、広くて、深い海であるインターネットに沖縄についての情報を少なくても出せられる。

以前沖縄のことを全然検索しなかった人は、初めて「沖縄」と打って検索すると、前には沖縄に観光スポット、海の写真、ホテルの予約のサイトしか出ないのです。これはグーグルのＡＩが「沖縄」について一番一般で、求められている情報を出すようにプログラムされているからです。ですが、もしその求められている情報を私たちが載せたものでだん

だん変えましたら、だんだん私たちの意見が初めて検索した人の前にも出始めます。これはバッターフライ・エフェクト、小さい物から大きな出来事が発生する、という意味の考え方を元にされた対策方法です。この方法が使われていれば、沖縄の声が小さい島から、大きな世界まで届けるようになれるのではないでしょうか。

しかし、情報を広げるだけでは、人の信頼をもらえないという心配もあります。ここでは、この情報を届けたい人達に「疑い」の感情はなければなりません。上記でもかけれているように、メディアに載せられた物はただ「事実」ではないのです。また、事実であっても、クロップされていて一番情報が取れない状態で私たちにあげられているのです。そこで情報をどう取れるか私たち次第となっています。

例えば、トルコからの例なのですが、２０１３年に行ったGEZİ「ゲジ」のでもの事をテレビで見せたニュースが、このデモの事を「ただ暴力を振る、ちゃんとしたの考えを持っていない若い人たち」と見せたチャンエルもありました。一方、「緑を守りたい若い人達」として見せたニュースも少なくともありました。

多くのニュースがこのデモの事を悪く見せても、大勢な人が「暴力を振った」その人たちを応援していました。なぜか後いうと、トルコ人はもうテレビや、ネットで魅せられていた物を疑い始めたからです。デモに行った人達を直接ツイッターや、フェイスブックからフォローして、その人達の意見を意見も見ながら判断し始めたからです。ある程度のトルコ人にはもう「嘘」が「フェイクニュース」が見えたからです。

沖縄の事を救うためにはまず、皆の頭の中には疑いを入れないといけないのです。「メディアはただこの方面だけじゃない」という言葉を言うようにならないといけないのです。

まとめ「私の感想、多文化の授業」

私のグループの皆と違って、自分の国以外のところの発表をするのは最初は怖くて、あまり知らない所について話して本当に大丈夫でしょうかなと心配したところもありましたが、今はこのテーマにしてよかったと思います。

多文化の授業を受けようと決めた時は、実際どんな授業を求めていいのかがわからなくて受けたのです。日本や、日本に関する問題について深く考えて、それについての自分の意見を述べる事は、今までそんなにやった事ではなかったので、授業中緊張していたところも少なくありませんでした。しかし、4ヶ月間この授業を受けて、私はその時まで知らなかった問題について知ったり、意見を言えるようになったりして、とてもよかったと思います。身に着けていなかった情報を得て、新たな視点から見えるようになったと思います。

沖縄のテーマを選んだのも実はこの理由でです。トルコだったらいくらでも話せる私には、知らない所について話せる能力を欲しかったのです。それで本当に「この授業から何か得た」資格を自分に感じられうと思いました。

沖縄の未来が今からどうなるか実は私に不安でしか見られていませんが、不安であっても応援し続けようと思っています。この私たちの応援が小さく見えても、バッターフライ・エフェクトのおかげで、大きなことになる可能性があるのではないのでしょうか。

多文化コミュニケーション　（木曜５限）岡先生

「プロパガンダの歴史」

０．始めに

社会へのメディアの影響がどんどん重要になっていき、徐々に個人として耳や目に入ることに対して抵抗できない現代において（例　新聞を自分の意志で開き、情報を知る時代に対して、今は町を歩いているだけ、テレビをつけっぱなしにしているだけでＣＭなどの影響で情報が入ってくる)、ネガティブな方向に意思を傾けようとし、本来の意識とは裏腹にコントロールを図るプロパガンダというメディアの方法は日に日に社会的意見に危険をもたらしていると思う。特にプロパガンダは政治の面で多いに使われるようになったため、ただのＣＭのようなプロモーションではなく、未来の世界平和をも左右する問題でもあると思える。プロパガンダというと第一次、第二次正解対戦の印象が強いが、現在でも非常に多いに使われており、気づかない間に洗脳されている例が思いのほか多々ある。授業をを通してプロパガンという言葉の意味だけでなく、日常にどういう風に染みついているかを判断する観察力を歴史的観察を通して身に着け、物事の判断を個人的な意見をもとにできるように心がけて欲しいという思いがある為このテーマを選び、発表およびレポートに打ち込んだ。

１．プロパガンダとは

プロパガンダ（日本翻訳_宣伝）とは「不特定多数の大衆を、一定の方向に導き、行動をおこさせるために、暗示、誇張、賞罰、デマなどの社会心理的なテクニックを使って、特定の考え方や価値観を植え付ける組織的なコミュニケーション活動をいう[1]」。Propagandaという言葉の由来はローマカトリック教会の１６２２年に計画された「コンレガーティオ・デ・プロパガンダ・フィーデ」(conregatio de propaganda fide) といういわゆる布

[1] 日本大百科全書(ニッポニカ)の解説

教聖省のプランから来ている。布教聖省は宗教を広めるミッションであるが、当時この言葉には現在のようなネガティブな意味は込められていなかった。ラテン語の propagare という動詞は「種をまく」などの普及、知識の広まりなどの意味をもっていた。

１９世紀に第一次世界対戦、その後第二次世界大戦の政治的メディアにプロパガンダが多いに扱われたのと同時に、今でいう「洗脳」や、「意思の悪用コントロール」などといったプロパガンダという表現の新しい解釈が生まれた。

レーニンは「何をなすべきか」という１９０４年に書かれた論文のなかでプロパガンダとは教育を受けた人に教義を吹き込むために歴史と科学の論法を筋道だてて使うこと」と、「教育を受けていない人の不平不満を利用するための宣伝するもの」と定義した。

２．プロパガンダの歴史

上述に書いたように歴史上最初にプロパガンダということばがつかわれたのは１７世紀のイタリアであった。当時は政治的な面をもっていなかったが、宗教中心の社会だったため、今とは違う意味ではあるが、政治的圧力を持っていたとも言っていい。

実際本来政治的な面を持っていなかったとしても歴史上のプロパガンダの成長を研究してみると徐々に「良いことが引きだつように悪い噂を流す」という軽いのレベルだったプロパガンダが政治にそまっていくのが見られる。

２．１．フランス革命

フランス革命時、ルイ１６世のオーストリア人の王妃、マリーアントワネットが、税金が高く生活が苦しいためパンさえも焼けないと訴える国民に対して「パンがなければお菓子を食べればいいじゃないの」と述べていたというデマがすでに王家に対してヒートアップしていたパリの人々の耳に入り、最終的に革命が起り、フランス王家と共にマリーアントワネットもギロチンで死刑が決まり、実行された。ルイ１６世の曾祖父であり、「太陽王」と呼ばれ、絶対君主制を築き上げたルイ１４世は様々な最新アイデアを実行し、フランス

はヨーロッパのみならず世界的に景気がよい国にしたにも関わらず、前王らに比べて王的才能も外見のカリスマ性もあまりぱっとしないルイ１６世の印象にくわわり、そして初期は人々に人気のあった外国からやってきた王妃、マリーアントワネットの無駄遣いが知れ渡り、これらが王家の築き上げてきた国民の中のイメージを壊してしまった。政治や経済にあまり詳しくない庶民は「パンがなければ・・」といった発言（実際はこういったことを王妃は述べていないという）や他のこのようなレベルのデマを元に王家に対し憎みを持ち、それが革命につながったと言ってもいいだろう。

２．２．共産党におけるプロパガンダ

前述にレーニンのプロパガンダに対する論を書いたが、共産党という理想的な社会を築き上げるために多いに必要とされたもの、メディア的アイテムがプロパガンダだった。筆者は元「共産党的社会主義」のハンガリー出身である為、プロパガンダと聞くと共産党のソ連やソ連に支配された国々で見かけられたポスターや映画やスピーチなどの印象が強い。

実際歴史上に名を遺したプロパガンダといえばソ連のスターリン時代のスターリンとトロツキーの間に起こった事件である。二人は初期のころは同じ共産党の考えを述べていて、マルクスやエンゲルスといった哲学者の共産党というアイデアをもとに理想的社会を築き上げるのを目標に肩を並べていたにも関わらず、ひょんなことから二人の意見が異なり、スターリンは国民に自分より人気があるトロツキーに己のポジションを取られる恐怖にかられ、トロツキーを「悪者」にし、反対運動、「幸せな社会を壊す敵の顔」とした。レーニンが言ったように学歴の少ない人々の意見を左右することがプロパガンダなので最終的にトロツキーのイメージをポスターや映画、新聞の記事などといったフェイクニュースで最低限まで下げ、ブラジルに逃げたトロツキーを殺害することに成功した。

この事件をもとに作られたのがジョージ・オルウェルの１９４９年の著作「１９８４」であると言われている。オルウェルの小説はは戦争が終わった後、ソ連に支配され、強制

的に共産党的社会主義にされた国々の未来を予想した作品である。共産党の世界をモデルにしたとは言い切れないが、当時のソ連の社会と共通する内容がいくつもある。この小説のモットーともなった「Big brother watches you」というスローガンともいえる言葉は政府の偉大さや、厳しさに怯えながら生きているのにもかかわらず、表ではその「偉大なる兄弟」をたたえるしかない、行き場のない恐ろしさと共に生活を送っている国民のシンボルとなった。主人公のエマニュエル・ゴールドスタインは共産党的社会主義の社会の中、反対運動を始め、最終的に政府の偉大な力に負け、拷問やマインドコントロールをされ、人間的に絶命するキャラクターはソ連のトロツキーがモデルとなったと言われている。

３．結論として

歴史を研究しているにあたって宗教的な、ある意味マイルドな「プロパガンダ」から人をも殺す恐怖の社会の第一アイテムとなってしまった「プロパガンダ」。戦争や庶民の生活が苦しくなる一方、政府のメディアに登場するプロパガンダもエスカレートする傾向が見られると思う。

ニュースやポスターや他のメディアの述べている情報を鵜呑みにし、「大半の人がこの意見だから」という理由で自分の意見を支配されてもいいと思っていては「みんなの社会」というものの意味が衰えてしまう。政治や社会の問題に対して過去のトラウマや自分の好き嫌いなどといった個人的な面は強調せず、いろいろなプラットフォルムのニュースを読み込み、意見を出す人々が多い社会になってい欲しいと願っている。

メディアを通じるタイのイメージ

現在はグローバル化の時代だと言える。『デジタル大辞泉』の解説によると、グローバル化あるいは「グローバライゼーション」というのはこのような二つの意味があるそうである。一つ目の意味は、「 国家などの境界を越えて広がり一体化していくこと。特に、経済活動やものの考え方などを世界的規模に広げること」である。二つ目の意味は、「コンピューターのソフトウエアなどにおける国際化。」という意味である。それで、現代は世界のどこでもだれでも進歩したテクノロジーズで繋がって、「メティス」を通じて情報を簡単にア

クセスできる。

私たちの日常生活の中に「メディア」を直接に触っている。朝起きてから、「テレビ」でニューズをみたり、「新聞」を読んだり、車で「ラジオ」を聞いたり、電車で「インターネット」で SNS をしたり、することのような関係がある。それで、今「メディア」は、人間に深く影響があると見られる。

人間の頭の中には、インプットされた情報を使って、そのものを勝手にイメージを作るのは当たり前のことだそうである。そのため、メディアに乗せられる情報もそのもののイメージも映られている。それに、映られるイメージは人の考えに影響を与える。具体的に言えば、イメージがいい国であれば、他の国にも注目されて、ビジネス、観光、技術なども発展されている。一方、イメージが悪い国であれば、逆になって悪化になるかもしれない。それで、イメージを大切しよう。

タイと日本はお互いに仲良く関係がある。タイ人の中に日本は人気があって、すごくいいイメージを持っているそうである。それで、タイに日本料理のレストラン、日本文化のイベントがある。それに、日本語の言葉でペットや子どもの名前を付けたり、タイ語の若者言葉として使ったり、することもある。その点で、タイ人にとって日本はすごくいいイメージがあるので、タイまで日本文化が広がっている。一方、日本人の中に「タイはどんなイメージが持つのか」知りたくて、様々な日本のメディアにおけるタイについてのイメージを調べてみたいと思う。

現代、一番簡単に情報をアクセスする方法はインターネットに乗せるものである。そのため、一般に情報アクセスするようにインターネット上のオンライン新聞、オンライン雑誌、テレビ番組の中心して、タイについてのことを調べた。

オンライン新聞によると、雑報、経済、環境、社会のような全面のタイでのニュースを実験的に提案されているそうである。その点で、日本人にタイのイメージはいい面も悪い面も直接に見せることができる。オンライン新聞のサイトは様々ある。例えば、『バンコク経済新聞』、『タイ通』、『newsclip』、『タイランドハイパーリンク』、『タイー毎日新聞』、『バンコク週報』のようなサイトだけでなく、インターネットに乗せられる紙の新聞も結構あるので、「タイ」という言葉で調べてみれば、結構出て、簡単にアクセスできる。新聞の内容は、新聞の種類によって違うが、雑誌と比べたら、雑誌の内容の方が軽いと感じる。

次は、オンライン雑誌で調べた情報を紹介したいと思う。インターネットで「タイ　雑誌」という言葉で調べると、『anngle』『Weekly Wise』　『DACO』のような様々な雑誌が出てきたが、内容はかなり似ているので人気がある『DACO』と『月刊ワイワイタイランド』を代表として選べて紹介した。「月刊ワイワイタイランド」は紙の雑誌であるが、インターネットの上でも情報がある。しかし、『DACO』は紙の雑誌だけでなく「デジタル雑誌」のバージョンもある。オンライン雑誌の内容によると、日本人にとってタイは辛い料理と象が特徴とする観光的な暑い国だと知られた。なぜなら、どの雑誌にも、タイの料理、象、タイの海、お寺、観光地のような写真をたくさん乗せられているからである。

最後に、テレビ番組におけるタイのイメージについての情報を紹介したいと思う。『TBS テレビのニュース』と『世界が驚いた日本！スゴ～イデスネ！！』という番組にタイについてのことが放送されたのを見つかった。『TBS テレビのニュース』で去年 9 人の少年サッカーチームとコーチが洞窟に閉じ込められた大きいニュースが詳しく発表された。一方，『世界が驚いた日本！スゴ～イデスネ！！』の方がタイの珍しいものや習慣を紹介した。その点で、「テレビ番組」によると、タイで起きる出来事と共にタイの面白くて独特なものも日本人に見せるそうである。

このように、今は、だれでもメディアを簡単にアクセスできて便利だと言えるが、多すぎる情報の中で、本当のことも嘘のことも混じっているので、信頼性も大切である。メディアを使用者として、信頼できるメディアだけ信じるべきだと思う。それに、毎日毎日地球が回っているとともに世界もいつも変っているので、情報もアップデートすることが必要と考えている。

多文化共修科目 B の感想

人間と動物の違いを表すものは「文化」だと思う。それに、文化は「身内」であるかどうかを決めるものだと見られる。世界の中に国籍、性格、興味、様々な基準で人間のグループはたくさん分けられている。それぞれのグループの社会も自分なりの文化を作って、生活しながら、後世の人たちに伝えている。それでは、世界の中に様々な文化がある。

昔、人間は自分と違うグループを見つけたら、認めなくてけんかしたり戦争したり、したが、時代が変わって、今は「平和時代」で、お互いに人間同士として幸せに生活することが大切されている。

今回、日本まで進学しに行く機会が得るので、様々な外国人とも日本人とも会ったり、話したり、考え・文化を学んだり、して交換するチャンスと言える。国籍や文化が違っても同じ世界で同じ社会に存在していて、お互いに知られて認めて尊敬したら、将来も幸せに生活できると思う。それで、この授業「多文化共修科学 B」では世界を模擬するように様々な違う文化を学べるだけではなく、自分の文化も他の人に紹介する機会だと言える。

この授業で様々な文化も、文化の問題または社会問題のことも学んだ。その内容は、教科書に乗せたことではなくて、知識というよりも実際に使える意識の方が教える授業だと考えている。文化についての内容を通じて、情報を知ることだけでなく、その内容より意見や解決する方法も考えさせて、内容を知るというより内容を理解して、実際に役に立って使えるの方が強調する授業である。

子供の時からずっと暗記して勉強していた私にとって、このような授業を始めたばかりに時、このような授業は難しくて、課題も宿題もいっぱいあって、大変だと思ったけど、一学期に経って、だんだん慣れてきて、一歩一歩自分なり意見を述べて、考えるプロセスも発達されると感じる。この授業で、認めって社会で幸せに生活できるよう多文化も学ぶ

とともに考えプロセスも発達している授業だと間違いない。

トルコにおける女性に対しての差別問題

このテーマを選んだ動機は一人の女性として今まで経験していた差別やトルコの現状を他の人にも伝えたいことである。世界中でどこの国に行ってもこの問題は生起していると思うが、私はトルコ人の女性の視点からトルコの現状と課題を述べたいと思う。

女性はトルコの人口の約半分になっているが、男性の雇用率は女性の２・４倍である。２０１６年のデータによると、女性は平均２７歳に結婚し、約１６％の女性は大学や短期大学を卒業できることである。女性の労働力率はこんなに低いの理由の一つは純就学率が低いからだと思われる。現在の女性の純就学率は昔と比べたら良くなってきてる。さらに、女性の方が男性より成績の成功率が高くなっている。しかし、女性の成功率が高いのに、キャリアの階段を昇ったのは男性の方が多くなっている。

女性の労働力率を高めるために、近年では女性が家でも仕事できるような環境を作ろうとされている。しかし、それで女性は家庭の外に興味を持ってはいけない、家庭の外に出てはいけない環境になってしまい、まさに状況は悪化している。

２０１８年に行われたグローバルジェンダーギャップランキングによると、トルコは１４４か国の中で１３１番目になっている。この調査は女性の労働力率やビジネス界で男女平等に機会を与えるかどうかや男女純就学率などを調べて発表する調査である。

２０１８年に行われた他の調査によると、トルコで２０１８年に男に殺害された女性の数は４４０人で、セクハラを受けた女性の数は３１７人である。殺人犯の８５％は旦那や彼氏である。女性の方が離婚や別れを要求すると殺害されることは少なくない状態になっている。私自身の経験であるが、私は住んでいた町でもこういう事件があった。離婚中のあるお母さんは子供と一緒にその町に逃げたのに夫に見つけられバス停で皆の前で殺された。こんなに恐ろしいことはトルコで日常生活の一部になってしまい、女性にとって危険な環境に変化しているのは女性として認められないことである。

トルコの政府は女性を暴力や殺害されることや差別などから守る政治的な強い意志を明らかに見せたら本当に何かが変わるかもしれない。例えば、２０１２年に発表された女性に対しての暴力を防ぐための新しい憲法が出たやまた同じ年にヨーロッパの１８か国と一緒に暴力を防ぐために成立された契約を結んだ。この二つの運動の後はトルコで起こった女性殺害事件の数は半分くらい下がった。このような運動を増やせば女性は安全に過ごせる環境を作れることである。

トルコにあるジェンダーギャップをなくすためには一番大事なのはまず政府が責任をとり、この問題を真剣に取り上げることである。例えば、文部省は小学校から男女平等やジェンダーについて教える授業を教育計画の中に入れたら、幼い頃それを学んだ子供たちは

大人になって男女共同参画社会を実現できると思う。

政治家は使ってる言葉や表現などにも気を付けて方がいいと思う。トルコ人の政治家は性差別的な言葉や表現をよく使っている。むしろ、男女平等という言葉をあまり使わないようにしている。男性と女性の生物的な違いや強さ・弱さなどを強調し、女性と男性は平等になれないということを国民に押し付けている政治家は少なくないことである。さらに、強姦されてからその子供を産みたくない女性に「その子供が死ぬんじゃなくてあなたは死んだ方がいい。子供が罪がないあなたの方が悪い」と言った事件もあった。トルコではこの政治家と同じ考え方を持っている人が非常に多いである。強姦事件が起こった時に皆が一番最初に聞くのは女性がどんな服装でいたやお酒飲んだことがあるかどうかなどである。こう言う基準で事件を判断し、女性が間違っているという結果を出す。であるため、政治家が言葉使いに気を付けるべきである。

差別問題において言語の影響は無視できないと思う。以上に述べたように政治家やメディアなどそして私たちも言葉使いに気を付けるべきだと思う。私自身も子供のころに、間違っている言葉使いの影響で差別を受けたことがあった。トルコ語には科学者という言葉は「科学」＋「男」という形で使われている。私は小学生であった頃に将来の夢は科学者になることだった。それを周りの人やクラスの友達に言ったら、ある男子の同級生に「君は科学者になれない。男だけができることだから」と言われた。理由を聞いたら、「科学者という言葉を見て、男の仕事っていう意味だよ」と言われた。小学生の私にとってはその言葉や意味は本当に認められないことであった。であるため、日常生活で使ったこういう言葉を変える必要があると思う。子供のころからこういう差別的発言をしないために言語を一から直すべきだと思う。差別している大人は子供のころからこんな言葉を使ってきたから、それは原因で差別者になってしまうと思う。

トルコ人の女性は面している差別問題は家の中や以上に述べたようにバス停みたいな公共の場所や職場などのようにどこにでも起こることである。職場で差別された私の先輩の経験を述べたいと思う。トルコのある会社の面接を受けて、その場で結婚予定があるかどうか、子供を産みたいかどうかなど聞かれ、その時までスムーズにいったのに不合格になってしまった。この質問は女性だけに聞かれて、結婚や出産予定がある場合には不合格になっていることである。

そして、もう一つの職場で起こった差別問題の例をあげたいと思う。もう一人の知り合いは博士課程に行って、男性の同僚に「何で博士課程まで行く？俺は君みたいに綺麗な女だったら絶対に働かない。お金持ちの人と結婚して楽に人生を送る」と言われたことである。この例で見られるように、女性は職場でセクハラを受け、尊重されず働くことは男性だけの役目で女性は家事だと思われる。昔ながらのこの古い考え方は今もトルコに残っている。これの原因の一つおしてはトルコ人の家庭の中では子供のころから家事をやらせられるのは女だけということが挙げられる。

今でも家庭の中でもし男の子が家事をやろうとしたらカッコ悪いと言われてやめさせられている。学校では適切なジェンダーや男女平等などについて勉強できないので、家庭の中で始まった間違いは大人になるまで大きくなっていく。

現在は女性を職場でサポートするため色々な活動は行われている。トルコの資本市場委員会(SPK)は２０１１年に重要な一歩を踏み出し、取締役会の中で最低一人の女性会員がいなければいけないというルールを作った。そして続いて２０１４年にそのルールを「女性会員の数は取締役会の会員数の２５％以上にならなけばいけないという目標を設定した。もしこのルールを守れず会員の中で一人も女性会員がいなかったら、その機関は理由を SPK に説明しなければいけないことである。

上に述べたような活動だけではこの問題を解決できないと思う。子供のころから考え方を変える必要がある。これは適切な教育が与えられた実現できることである。適切な教育を与え、または女性を守る憲法改正をするべき。これは政府がやるべきことであって、国民と一緒に新しい男女共同参画社会を作るべきだと思う。

授業全体的な感想

この授業を通して色々な国の人と交流でき、今まで存在したことさえ知らなかった色々な文化が私の世界に入ってきた。そして、その違う文化とどうやって接すればいいか、またはその文化をどこでどうやって生かせるなどを考えるようになった。

例えば、ロヒンギャの問題を同じ地球に住んでいるのに聞いたこともなかった。同じ人間であるのに、どうして世界はその人たちのことを無視してるやメディアはどうして多くの国の人にこの問題を伝えていないなどのようにことについて考えさせられた。そして、この問題をできるだけ他に伝えて自分の国に帰った際にもまだ伝えているように頑張りたいと思う。私一人でトルコみたいな色々な問題を抱えている国で他の一人に伝えるだけで何かが変わるかが分からないが、何もしないで無視するよりいいと思う。

この授業で色々な背景と文化を持っている人とであって多文化共生や世界中における根深い問題などを話すチャンスがあってよかったと思う。皆価値観や嗜好が異なる国から来ても意見交換をできた。これからも皆それぞれの国に帰り、多文化共生社会を成功するため動力すると思う。人は心を開けば相手も応じてくる。違う文化や宗教の相手と手を取り合って行けると思う。綺麗事に聞こえるかもしれないが人間として身につけるべきことである。

参考文献

The Global Gender Gap Report 2018
http://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2018.pdf
YÖNETİM KADEMELERİNDE KADINA YÖNELİK CİNSİYET AYRIMCILIĞI VE CAM TAVAN SENDROMU

http://www.asosjournal.com/Makaleler/962658516_264%20HATUN%20KORKMAZ.pdf
TOPLUMSAL CİNSİYET EŞİTLİĞİ POLİTİKALARI VE KÜRESELLEŞME
https://www.journalagent.com/pausbed/pdfs/PAUSBED_2018_30_133_143.pdf
Kadınların Üst Yönetimde Temsilinin Arttırılmasına Yönelik Uygulamalar ve Öneriler
http://www.yased.org.tr/ReportFiles/2016/YASED-KadinRaporu.pdf
Üst Yönetimde Kadın Temsili: Avrupa Birliği ve Türkiye'deki Gelişmeler
https://www.tusiad.org/tr/fikir-ureten-fabrika/item/5533-ust-yonetimde-kadin-temsili--avrupa-birligi-ve-turkiyedeki-gelismeler
https://tr.euronews.com/2018/12/13/rop-gulsum-kav-yeni-havvalar-eski-ademleri-yenecek-kadina-yonelik-siddeti-onlemek-mumkun
https://tr.euronews.com/2018/05/03/-turkiye-de-her-alanda-erkek-kollan-yor-
https://www.evrensel.net/haber/369898/2018de-440-kadin-katledildi-317-kadina-cinsel-siddet-uygulandi
http://www.resmigazete.gov.tr/eskiler/2012/03/20120320-16.htm

中国における LGBT＋

I 発表内容：

（1）このテーマを選んだ動機：

去年の 4 月に、中国の SNS である微博（ウェイボー）が、政府の意向を受けて同性愛に関する内容の書き込みを禁じる通達を出したことがあった。インターネット安全法などに基づいて「明るく調和のとれた環境を作るため」として、微博（ウェイボー）が投稿された低俗で非道徳的な内容を排除すると発表、その中に、同性愛に関わるアニメ、漫画、小説やネットドラマないずれの一部も削除することとなり、さらに同性愛に関する発言もすべて削除されたということに気づいた投稿者が現れ、当事者たちから抗議が殺到した。

雑誌『TIME』によると、中国の LGBT＋コミュニティーの人口は推定で 7000 万人といわれる。この人数はイギリスの全国人口数と相当するという。残念なことに、1949 年から現在に至り、中国の社会環境は同性愛者に対して全体的にまだ保守な態度を取り、性的少数者に対する正しい認識と理解できる人はさらに少ないことである。

日本に来てから、この授業だけでなく、他の授業でもよく LGBT＋のことを耳にする。日本では LGBT＋に関する教育が進んでいるなと強く感じている。実際に中国からの留学生と話してみると、LGBT＋という言葉が知らない人が意外に多い。筆者もこの授業を受ける前に、LGBT＋に関する情報量が少なかった。従って、今回の授業を介し、今まで興味を持ち

続けてきたテーマを対象に、知識と理解を深めていく一方、把握できたこと、特に中国における状況を他の学生に紹介することで、他国の学生に中国に対するイメージを掴ませる、及び中国の留学生に母国における LGBT＋の現状を理解させることが目的である。

(2) 概要：

A. LGBT＋から SOGI へ

まず LGBT＋それぞれの意味を紹介したい。LGBT＋とは、L（レズビアン）・G（ゲイ）・B（バイセクシュアル）・T（トランスジェンダー）の略で、セクシュアルマイノリティ（性的少数者）を意味するという[2]。しかし、詳しく調べたところ、LGBT＋に関する呼び方が数多く、その末尾に更にいくつかのアルファベットを追加して、「LGBT＋Q」や「LGBT＋A」、「LGBT＋QIA」等と呼び表されることもある。つまり、LGBT＋以外のセクシュアリティはたくさんあると考えられる。従って、さらにわかりやすく示すために、LGBT＋あるいは LGBTs を複数の意味を付け加えることになっている。

ところが、2011 年の国連人権理事会で LGBT＋という呼び方ではなく、SOGI（ソジ・ソギ）という言葉が示された。SOGI とは、どの性別を好きになるか/ならないかを表す「性的指向（Sexual Orientation)」、自分の性別をどのように認識しているかを表す「性自認（Gender Identity)」の頭文字を取った言葉である。言い換えれば，LGBT＋という言葉は、特定の人に着目した言葉であり、何かを考えるときに LGBT＋とそうでない人に分けてしまいがちなものの、性的指向（好きになる性)、性自認（心の性）という「人の属性を表す略称」である SOGI は、異性愛の人なども含め
全ての人が持っている属性のことを指している。つまり、LGBT＋はマイノリティを表す言葉であるならば、SOGI はマジョリティ（多数派）も含めたすべての人が持つ属性（すなわち人権であること）を表現する言葉である[3]。

B. 中国における LGBT＋（ここで、中国大陸のことを指す）

最初は中国における LGBT＋の歴史を振り返りたい。1949 年以前は、LGBT＋に対する社会環境が比較的に包容であり、中華民国の財政家である孔祥熙（こう しょうき）の娘、孔令偉は、当時レズビアンであることをカミングアウトした人物である。1949 年後、中華人民共和国が成立したことと共に、すべての同性愛の行為はソドミーという言葉に冠され、文化大革命後の刑法改定で同性愛が「流氓罪」あるいは「鶏姦罪」として犯罪行為と見なさ

---

[2] https://lgbt-life.com/topics/aboutLGBTqia/『LGBTQ の「Q」とは？　様々な LGBT の呼び方と多様なセクシュアリティを知ろう』

[3] https://www.jtuc-rengo.or.jp/activity/gender/lgbtsogi/『「LGBT」「SOGI（性的指向・性自認）」ってなに？』

れていた。

80 年代から 2000 年は、同性愛に対する変化が、改革開放によって一部現れた。とくに沿海地区における大学は 80 年代 LGBT＋文化の集まり地となり、1997 に香港返還と共に新刑法は同性愛行為が非犯罪化されたが、公的に話すテーマではなかった。2000 年以後、中国政府は同性愛行為を「政治疾患リスト」から除外され、2005 年に中国国内同性愛（ゲイ）に関するデータを世界中に公開することで、同性愛者が初めて政府から公的に認められたと考えられる。その以後、同性結婚や LGBT＋に関する提案が続々政府に提出されたものの、すべて却下された。2011 年、国連の「LGBT＋市民の置かれた環境や状況に関する報告書のドラフト作成の決議案」の投票で、棄権３票のうちに中国が一票を投じたことが分かった。

2018 年 11 月 6 日、国連人権理事会（UPR）第 31 回中国人権セッションが中国で行われ、中国外交部は初めて、LGBT＋の課題について正面から答えた内容は以下に示す：

1、 中国政府は向来、LGBT＋コミュニティの健康権利を尊重し、そして平等な社会保障を与える。

2、 性別適合手術を受ける権利を守る

3、 現在、中国政府は、LGBT＋コミュニティに同性と結婚の権利を与えないのは、差別視をしているのではない。

4、 この政策は中国の歴史文化とその価値観による決められたものである。

ようするに、中国政府は支持せず、反対せず、提唱せずという政策を掲げるのではないかと思われている。それでは、近年中国における LGBT＋に関わる法律事件をいくつ挙げてみたい。

①2015 年 6 月 23 日、同性愛カップルは市役所に婚姻届を出し、二人とも男性で不受理となったゆえ、市役所を起訴。2016 年 1 月、裁判所から原告敗訴という判決が下された。

②2016 年 3 月 7 日、トランスジェンダーであるＣさんは会社による就職差別で労働訴訟を起こした。これは、中国初めてのトランスジェンダー人権事件である。同年、原告側が勝訴する判決が分かった。

③2018 年 1 月 19 日，広州地区女子大学生は、大学教材にある同性愛嫌悪の内容に対し、本の出版社と販売サイトを訴え、判決が未だに出ていない。

④2018 年 9 月 19 日，幼稚園教師である同性愛者Ｍさんは、幼稚園から同性愛であることで解雇されることで、労働訴訟を提起し、11 月 22 日、法廷から M さんが勝訴という結果が分かった。

上記のように、4 つの例のうち、労働訴訟として提起した事件（②と④）はすべて勝訴で解決済みであったが、原告が LGBT＋で差別視される理由で勝ったわけではなく、会社から確かに不当な方法で解雇されたという理由で勝訴したという。

C. まとめ：

このように、中国では、LGBT＋は違法ではないが、中国において LGBT＋の人々が雇用、結婚、居住、財産などで差別を受けた場合に拠り所となる法的手段が一切ないが明確である。

1949 年以来、中国では依然として LGBT＋に対する世間の理解が顕著に進まなく、まだ偏見や差別が根強い社会である。政府側では何も行動を示してもらえない。しかし、近年、民間側では LGBT＋コミュニティが形成されつつあり、ボランティア団体も存在している。そのほか、LGBT＋の認知度を広げようと考えている教育者がおり、教材に LGBT＋の紹介を導入する小学校とその性教育の教材を自腹で購入し、家庭で子供と一緒に読むという親たちも現れている。インターネットの普及によって、新たな観念や考え方が中国社会に入り、70、80 年代生まれの人たちは親世代の主流となり、特に都市出身の多くの人は良い教育を受け、包括的な性教育を子供に受けさせると考えている親たちは少なくない。冒頭で述べた微博（ウェイボー）で炎上した同性愛に関するコンテンツ禁止の事件は、ハッシュタグ「#我是同性恋（私は同性愛者）」を付けた抗議行動で多くのユーザーがボイコットを呼び掛け、中国共産党の機関紙「人民日報（People's Daily）」さえもが、同性愛的な内容がポルノや暴力に対する検閲から免除されるわけではないとくぎを刺しつつ、LGBT の受容を促す論評を微博に投稿したことで、最終的に撤回された。今まで難航してきた LGBT＋コミュニティは、これからも任重くして道遠しであるが、なんとなく前に少しずつ進んでいけると期待できるのだろう。

II：振り返り

今回は LGBT＋を対象に詳しく調べてみたが、発表までには LGBT＋の情報はまだ不足しているところがたくさんある。例えば、今まで LGBT＋を中心にした法律の提案はどのような内容であったか、そして中国政府初めて公開したファイルにはどのような内容が書かれているのか、更なる有力なデータを示せばより客観的に示すのは改善すべきところである。

最後の発表で、ジェンダーをめぐって異なる視点で論議しました。とくに日本とスウェーデンの話が聞けたことで、国が違うが、それぞれの社会は、それなりの努力をしていることは、急に世界は一つだという感じがしている。最後まとめの時、中国に対する今までの印象が変わったというコメントでとてもうれしかった。なんとなく多文化理解というのはどのようなことが分かった気がした。

II 授業全体の感想：

途中でクラスに入ったため、この授業を受ける前に、ほかの国の学生と楽しく話すだけの

授業ではないかと気軽に思っていたのが、最後は半分重い、半分嬉しいという複雑な気持ちで授業を終えた。最初はマイノリティとマジョリティという言葉さえ知らなかったが、単語を調べて文字通りの意味を知ったとしても、その裏に持っている深意はそんなに早く理解できていなかった。いつも多様性を口にするが、一体多様性とは何だろうと自問する。授業が進んでいるうちに、様々なテーマをめぐり人や資料に向き合い、どんな人がいるか、どのような生活をしているのかを知ってから、自分もどこかであるいはいつかマイノリティになりうることをつねに意識するようになった。決してすべて愉快な授業内容ではないが、毎回授業の最後で自分に何ができるかということを思わず考えさせられ、理解と尊重することが他人に対してどれだけ大切なことなのか強く感じている。

参考資料：

・LGBTQ の「Q」とは？　様々な LGBT の呼び方と多様なセクシュアリティを知ろう

https://lgbt-life.com/topics/aboutLGBTqia/

・「LGBT」「SOGI（性的指向・性自認）」ってなに？

https://www.jtuc-rengo.or.jp/activity/gender/lgbtsogi/

・LGBT 中国史：是权利解放还是愈发沉默？｜少数派计划

https://www.sohu.com/a/159032346_651654

・多様な性のありよう ～LGBT・SOGI・SOGIESC の理解に向けて～

https://www.tama-100.or.jp/cmsfiles/contents/0000000/798/tayounaseinoarikata.pdf

・LGBT とは何か? 性的マイノリティを正しく理解し、差別のない社会環境を

https://lightworks-blog.com/lgbt-outline#2-2

木曜５限　多文化共修科目 B　最終レポート

日本のトランスジェンダー

１．自分の発表内容とその振り返り

私はジェンダー問題を発表するグループの中でも、日本のトランスジェンダーの現状について発表した。

テーマを選んだ動機としては、大学に入ってからいろんなジェンダー問題について学んだが、多くがその大まかな概要で実際はどうなのかがわからなかった、また、日本の現状を知ってもらうことでほかの国との比較をしやすいと思ったからである。

内容としては、日本のトランスジェンダーの現状を述べ、トランスジェンダーへの日本

の対応についての私なりの疑問点を掘り下げて調べてみた。結果としては、日本のトランスジェンダーへの対応はまだまだ法的設備としては整っていないが、他の国と比較してみると意欲的に進めていこうとしていることが分かった。戸籍変更について調べてみたことは新たな視点だったため自分でも良かったと思う。まとめは、トランスジェンダー選手のことを挙げて、東京オリンピック 2020 についての日本への期待を述べて終えた。

うまくいったこととしては、わかりやすい説明を心掛けられたこと、声の大きさやアイコンタクトを意識したため、ただの調べたことの発表ではなく聞き手を意識したプレゼンテーションができたことである。評価プリントの評価も身振り手振りや発表内容で A が多かったことからも、私の意識していたプレゼンテーションができていたことが確認できた。感想も「わかりやすかった」「勉強になった」という評価があったので、調べて発表する内容をピンポイントに絞り、その疑問点を解決していき、自分の意見を述べる形式をとったのが功を奏したように思う。余談として、オリンピックにつなげてまとめたが、そのまとめ方についてもよかったという評価もあったので、今後のプレゼンテーションへの自信につながった。

うまくいかなかったことについては、質疑応答と話すペースがうまくいかなかったように思う。質疑応答は、そもそも私の意見を多く盛り込んだ内容だったためコメントが多く、質問自体がなかった。話すペースは、私自身が関西出身だということもあり、緊張で関西弁混じりの発表になってしまったためか、私自身としては通常の速さでプレゼンテーションを行ったつもりだったが、全体的に話すスピードが速いというコメントが多かった。このことから、プレゼンテーションの時は、普段の話す速さより抑えたほうがいいということを学んだ。

今後の課題としては、ピンポイントに絞りすぎて資料などをあまり活用できず、根拠のあるプレゼンテーションができなかったので、今後は資料や学術的な論文も活用して信憑性の高いプレゼンテーションを心掛けようと思う。今回うまくできなかった質疑応答と話すペースについては、質疑応答は、事前にどのような質問がくるかを予測していつでも対応できるように準備しようとおもう。話すペースは、録音やビデオで事前に練習して客観的に自分の話すペースはどうなのか、聞き取りにくいところはないかを確認するなどするようにすると、誰もが聞き取りやすくて、スライドに頼らなくても理解できるプレゼンテーションができると思うのでこのことを意識したい。

また、今回は、グループごとの発表だったが、グループとしてはあまりまとまりのない発表になってしまったような気がした。個人個人が自分のすべきことを早めに仕上げ、グループ全体での聞き合いや意見交換をすることで個人のプレゼンテーションの質も上がり、グループとしても一体感がでると思うので、今後グループでのプレゼンテーションがあった場合は、前もってグループでの練習時間やリハーサルがとれたら良いと思う。私個人としては、全体的には良いプレゼンテーションができたと感じたので、それに驕ることなく、より良いプレゼンテーションができるようにまずは話すペースから改善していきたいよう

に思う。

２．授業全体の感想。授業で学んだこと。不十分だったこと。

主に、日本においての多文化について学んだ授業だったが、普段はニュース番組で見て、他人事のように流していたことについて詳しく学ぶ機会を得ることができてよかった。

日本の外国人労働者については、上京してからコンビニで働く外国人が多いことが気になっていたので大変勉強になった。日本が中国と提携を結んでいることを知らなったので実際に留学生から話を聞けたのが身になった。時給が日本人と異なる事件、労働災害に対する保険が適応されない事件があったことを学んで、国とか関係なく人間としての権利を与えることは絶対的なことだと感じた。

日本の民族問題については、上京してきて、新大久保に何度か足を運んでいて、日本の韓国街を事前に体感していたので授業にアプローチしやすかった。日本は、島国ということもあって、どうしても歴史的に閉鎖的で同和や協調を求めてきた国ということもあり、何となく気持ち的に差別が起こっているのではないかと思った。これからの多文化が入り混じっていく未来において、独自の文化を押さえつけるのではなく、共存していける社会を築けたら良いと思った。

沖縄の米軍基地移設工事の問題については、まさに同時期に沖縄知事選が起きて工事が中止になったり、辺野古埋め立てが再開されたりして、ビデオで沖縄の実情を知りながら、現実でも辺野古移設における国と住民の抗争が起きたので、他人事のように感じられず、印象に残った。座学で紙に収まった資料を見るのではなく、リアルなドキュメントを見ることで同じ日本という国なのにあまりにも無関心だったということに気付かされた授業だった。

外国にルーツを持つ子どもへの教育については、日本でも近年そのような子供が急激に増えたこともあり、早急に対応が必要だと思った。子どもは、周りの環境がその後の人格形成に大きな影響を及ぼすので学校と保護者の関係と、親と子どもの関係のどちらも力を注がなくてはならず、地域での連携が求められるように感じた。

障がい者文化については、実際にゲストスピーカーの方の話を聞き、体験もできたことが大きかった。障害ではなく障碍、個性という表し方はどうなのか、改めて考えさせられた授業だった。実際に、宝塚市で障碍という表記に変わったというニュースを見て、授業で習ったことが活かされたと感じる。

ジェンダー、LGBT の問題については、国によって違いが大きく出たので、いろんな国から来た留学生と日本人生徒で授業を行ったことの良さが出たように思う。女性の問題についてはスウェーデンとトルコの違いがとても勉強になったし、LGBT の問題についても国ごとの感じ方や、対応の違いを知ることができたことがかなり勉強になった。

それぞれの自分にとっての多文化の発表は、自分の国における発表が多かったことと、その人自身の価値観や人生観を知れたことに多文化の素晴らしさを感じた。

グループでの発表については、授業で学んだことの＋αや違う視点からの発見ができたことが大きかった。しかし、せっかくなら日本における多文化の問題は一応授業を通して学んだので発表者自身の国についての発表で、日本との比較があればよかったように思う。また、日本人はあまり前に立って主張することが得意ではない一面があるので、留学生とともに発表を行うことは自分にとって学ぶことが多かった。特に、身振りや手振りは参考になったので、今後に生かしていこうと思う。

最終授業のワールドカフェは、私の所属する表現教育コースではかなり頻繁に行うディスカッション形式だが、表現教育コースの人以外とはしたことがなかったので貴重な経験だった。意見を共有して、相手の意見を否定するのではなく、尊重したり、そこから発展させたり、つなげていくことが楽しかった。最後にそれぞれがキーワードとして挙げた言葉にこの多文化共修科目で学ぶべきことのすべてが詰まっていたように思う。

反省点としては、課外活動に参加できなかったため、授業内容のフィードバックが十分でないことである。ゲストスピーカーから生の声を聴くことがいかに学べることなのかを授業で実感していたのでなおさら悔やまれる。機会があれば自主的にヒューマンライブラリー等に参加したい。

授業自体は終わってしまったが、多文化共生を考えることは今後私が生活するうえで忘れてはいけないことだと思う。私は、最後のワールドカフェで自分にとってのキーワードに「知る」を挙げた。この授業を通して多くのことを知った。無知の知という言葉があるが、まず知らなければ何も始まらないと思った。今まで気にしたことがなかったことに興味をもつことや一歩踏み込んでみることは結果として多文化につながっていくように思う。私にできることをたとえ微力でも続けていきたい。そして、人との出会いや輪を大切にしていきたい。

スウェーデンとトランスジェンダー

初めに

トランスジェンダーのコンセプトは違う名前で文明社会の初めからあった。例え、アメリアのトゥースピリット、インドのヒジュラーなど。現在、スウェーデンはトランスジェンダーの人の権利を認められている国として有名である。これはなぜなのだろうか。しかも、実際にどうだろうか。

歴史

トランスジェンダーという言葉が作られる前、トランスジェンダーの人は存在したことは事実である。しかし、歴史的に知られている話は少ない。スウェーデンで最も歴史的に有名なトランスジェンダーの人は 17 世紀のクリスティーナ女王様という人である。クリスティーナは 1632 年から 1654 年までスウェーデンの女王様であった。男性の服を着ており、狩猟などの男性専門趣味を持ち、まるで男性のように生活をしていたそうだ。王室であったため、当時の女性に比べ、自由に生活できたが、それでもクリスティーナは様々な噂をされたそうだ。女性との恋愛や、自分のアイデンティティを隠し、男性として町を歩くことなどという話が広がっていた。クリスティーナはおそらく社会で苦しんでおり、1654 年に女王という立場を放棄し、カトリックに改宗し、死亡までイタリアに住んでいた。

このような話は意外とあるが、学校などであまり教えられていない。しかし、近代のトランスジェンダーの権利のための活動で徐々に明らかになっている。トランスジェンダーの存在が多くの人に知られてはじめたのは 20 世紀の初めからではないだろうか。そのとき、ドイツ人の医師が Transvestite という言葉を初めて使った。その言葉は現在のトランスジェンダーの本来である。それから言葉が次第に増加し、現在フェイスブックだけでユーザーがほぼ 60 種類から選択可能がある。

Transvestite という言葉の誕生から 60 年かかり、トランスジェンダーの性別適合手術はスウェーデンで初めて成功したのは 1968 年である。その時、患者が様々な資格を備える必要があった。未婚、スウェーデンの国籍、不妊手術完了などということだ。1971 年にスウェーデンで初めてトランスジェンダーの人が身分証明書を男から女変化できた。

2009 年にトランスジェンダーに関する様々な法律が変わった。トランスジェンダーを理由とする差別の解消の推進に関する法律が成立し、成人が身分証明書の性別に関わらず名前を選べるようになった。言い換えれば、身分証明書で男が書いてあっても、女性の名前に変えることができるようになった。または、同性結婚が容認されることとなったので、

トランスジェンダーが離婚せず身分証明書で性別を変えるようになった。

2012 年にスウェーデンの行政控訴裁判所が不妊手術の資格が憲法に反していると決定した。その結果は、結婚しても、国籍待たなくても、不妊手術を受けず、性別適合手術できるようになった。この影響で「RFSL」というセクシュアルマイノリティの人々のために活動している組織が、政府に金銭的な補償を需要した。2017 年需要を受容し、不妊手術を受けさせられた人（大体 600－700 人）に 3 百万円ずつ支払いすることになった。

現在

トランスジェンダーの活動が推進している間、トランスジェンダーの言葉の意味が広がった。ジェンダーということは性別と別にし、様々なアイデンティティが誕生された。英語の sex（体）と gender（心）を区別し、本人に合うコンビネーションを選ぶようになった。トランスマン（体が女が心が男）およびトランスウーマン（体が男が心が女）ということだけだはない。バイナリーおよびオンバイナリーに分けることができる。バイナリーというのは女及び男という意味である。ノンバイナリーというのはその二つにのみならず、男でも女でもない。ノンバイナリーのことは日本語で X ジェンダーという。X ジェンダーは欧米でも、日本でも最近認められてきた。X ジェンダーがオーストラリア、カナダなどに身分証明書でも選べるようになった上、言語まで変えようとする国が増加している。スウェーデンの Hen という人代名詞が 2012 年辞書に追加された。社会上話題になり、反対した人が多かった。反対した人の理由は保守的な考え方のより、性別は二つに過ぎないので、言葉の必要がない。

続いて、スウェーデンで、ジェンダーフリー幼稚園が次第に増加している。ジェンダーフリー幼稚園というのは、スタッフが子供に対し Hen を使い、活動はできるだけ家父長制の影響を意識し行動することだ。1960 年代からあったが、まだジェンダーフリー教育の結果に関する研究は少ない。ただし、2017 年に小さい研究（80 人の生徒）の結果が発表さ

れ、ジェンダーフリー教育の生徒が比較的にジェンダーに対する広い考え方があるということが分かった。その一方、社会上、ジェンダーフリー教育はただ子供たちを混乱させることだけになるという意見を持っている人が多い。しかし、この混乱させる可能性は研究によってまだ見えていない。

トランスジェンダーに関しての調査

スウェーデン公衆衛生局（Folkhälsomyndigheten）が 2015 年に行った 800 人の調査によると、二人に一人のトランスジェンダーが「最近差別されるのは怖いので出かけないようにしている」および「最近差別されたことがある」を答えた。三人に一人は「自殺を考えたことがある」および「いじめられたことがある」と答えた。最後に五人に一人が「暴力されたことがある」と答えた。

また、RFSL による 2017 年に行った 472 人の調査に「自分に合っている性別として生活できるのか」という質問に 38%が「できない」あるいは「あまり」と答えた。カテゴリーに分けたら、こう答えたトランスマンおよびトランスマンは 30%に過ぎないが、X ジェンダーが 58%「できない」あるいは「あまり」と答えた。したがって、ノンバイナリーとして生活するのほうが難しということがわかる。同じ調査に「今の精神的な健康」について聞いたら 37.8%が「健康」を答え、39.9%が「まま健康」を答え、29.3%が「健康ではない」を答えた。

まとめ

調査の結果により、トランスジェンダーに人は、精神的な問題が多いことがわかる。セラピーや精神的なサポートを強調する必要がある。前強調された手術に向いていた活動は成功しても、トランスジェンダーの人による精神的な問題が消えたわけがない。

また、調査に明らかになったことは、トランスジェンダーの人が病院に行かないこと

が多いということだ。なぜかというと、医師および看護師のトランスジェンダーに関する知識が低いので、自分のアイデンティティが求められないことや自分がトランスジェンダーであることで差別されることなどが怖いからだ。ジェンダークリニック、ジェンダーを専門とするクリニック、は徐々に多くなっているが、都会に過ぎない。田舎に住んでいるトランスジェンダーの人は都会に住んでいるトランスジェンダーと全く違う状態にいるのは間違えない。

身分証明書でオーストラリアのように X ジェンダーを変化できるようになると、法律的に本人に合っていることになる。それで周りの人の見方が急に変わるわけがないが、きっかけとして大切ではないだろうか。

RFSL の調査に基づく結果を考えるとスウェーデンのトランスジェンダーの人が自由に生活できるまではまだ時間がかかることは否定できない。しかし、20 世紀の初めからの推進を見ると、社会が徐々に様々なジェンダーの存在を受け入れていくのだろう。22 世紀になると、身分証明書の申込書を書くときに、フェイスブックのように 60 種類のジェンダーから選べるのだろうか。

参考

https://www.lagboken.se/Lagboken/sfs/sfs/2013/400-499/d_1655814-sfs-2013_405-lag-om-andring-i-lagen-1972_119-om-faststallande-av-konstillhorighet-i-vissa-fall

SOU 2007:016 Ändrad könstillhörighet - förslag till ny lag (Statens offentliga utrdedningar)

https://www.folkhalsomyndigheten.se/nyheter-och-press/nyhetsarkiv/2015/juni/ohalsa-och-stor-utsatthet-bland-transpersoner/

https://www.rfsl.se/wp-content/uploads/2017/11/Trans_health_2017_RFSL.pdf

http://www.do.se/om-diskriminering/skyddade-diskrimineringsgrunder/konsidentitet-oc

h-konsuttryck-som-diskrimineringsgrund/

https://www.hd.se/2015-12-21/hen-tar-plats-i-ratten-for-forsta-gangen

https://www.svt.se/nyheter/inrikes/tvangssteriliserade-transpersoner-far-ersattning

http://transformering.se/vardhalsa/transvard/konsutredning

http://www.transformering.se/vad-ar-trans/transhistoria

2018　多文化共修科目 B 授業評価アンケート　集計結果

回答者数 9 名

Ⅰ．留学生（日本人学生）と共に学んで、よかった点、改善すべき点をあげてください。

よかった点：他国の状況を知ることができた。／様々な視点からの意見を聞くことができた。／日本人と日本語を話す機会が増えました。それに日本人らしい考え方も学びました。／ほかの国の留学生と一緒に多文化の授業を受けることは、前よりもっと広い視野でコミュニケーションということを理解できるようになりました。／日本の事で様々な知識を得ているところ、その問題と面している日本人の意見を聞くのも楽しかったのです。／日本人学生とともに学び、交流しながら、お互いに理解できるようになりました。それに、日本語で喋るのは自信が持つようになりコミュニケーション能力も一段アップしました。／色々な国の人たちの色々な意見を聞ける数少ない機会の一つでとても興味深かったです。／今学期での日本人学生の参加者は少なくにかかわらず、彼らの海外のイメージ、日本の中に存在するいろんな文化についての意見を聞くことができたのは１つの良かった点です。もう１つは、学生としての同じ立場で多文化について話したことです。

改善すべき点：毎回ディスカッションができたらよかった。／日本人らしく日本語を話すスピードは速くて、時々聞き取れませんでした。／みんなバラバラに座っていて、自分の国の友達だけと一緒に座っていることは、お互いに交流しにくいのではないだろうか。／日本人の学生の数がさらに増やすほうがいいと思います。／あまり積極的ではなくて、意見を言おうとしない学生とはディスカッションが嫌いでした。／

Ⅱ．この授業の趣旨である「多文化社会」に対する理解と「コミュニケーション」が深められたと思いますか。

１．多文化社会に対する理解が深められましたか。　はい 9 名　いいえ　わからない

コメント：他国の政策を聞けるのは勉強になった。／授業のメンバーも様々な外国人で、お互いの文化を学びながら交換できた。／異なる国の留学生は自分の国のことを紹介してくれました。／日本と日本人の事をもう少しわかるようになったと感じました。／ほかの国または地域のことを知り、関心を持つようになりました。／様々なトピックをめぐり問題を示すことで、徐々に多文化社会とは何か感覚をつかみました。

２．コミュニケーション力がついたと思いますか。　はい 9 名　いいえ　わからない

コメント：最初の自己紹介をしたのがすごくコミュニケーションをとれるきっかけになった。／発表してから、みんなの評価を受けたり、ほかの人の発表内容を評価したりすることがコミュニケーション力を高められると思います／日本人と、外国人の私たちが日本語を使いながら、様々な問題について意見を述べて、お互いの事

を理解できるように頑張ってたことはよかったのです。／日本人以外に日本語で喋るのはなかなか不思議なことだと思います。日本語で交流するのは楽しんでいます。／授業中でグループごとに他の国の学生と話しあい、考えをシェアすることがとても勉強になります

Ⅲ．授業の各トピックについて、評価（５．非常によかった。４．よかった。３．普通。2. あまりよくなかった。1. よくなかった。）とコメントをお願いします。

１．在日外国人問題を知る―DVD となりに生きる外国人視聴　５．４名、４．４名

コメント：在日外国人の現状は知れたけど、具体的な問題の解決についても観たかった。／日本で生活している外国人同士に気持ちがわかりました。／在日外国人という問題は関心を持つようになります。／町で歩きながら同胞にマナーを守る呼びかけのシーンが非常に印象深かったです。この国で本当に暮らしていきたいなと感じています。／

２．在日コリアン問題について考える　５．４名、４．４名

コメント：身近な問題だけど詳しく知らなかったので参考になった。資料もわかりやすかった。／虐殺の問題について知れたのが良かった。／今日本で確かにコリアンと中国人は不平等で扱われますが、私たちは何とかこの問題についてするべきことがあると思います。／授業後在日コリアン問題についてもしらべていましたが、思った以上劣悪な環境に生活していると感じています。まずアイデンティティが確実にないということが問題で、民族主義的な教育を受けているイメージが強かったですが、朝鮮学校に実際に体験してみましたが、自分民族の文化や伝統を伝承する努力にとても感動でした。

３．難民問題を知る　ロヒンギャ難民キャンプ動画「祈りの果てに」　５．６名、４．２名.

コメント：トルコの難民受け入れの話も聞けたので日本の今後の難民受け入れへの対応に関心を持てた。／問題意識を持つきっかけになった。／おかげさまで、初めてロヒンギャ難民の問題を考えさせました。／中国で難民問題殆どないですから、前は難民問題に興味を持っていないわけです。ロヒンギャ難民問題を知ると、ロヒンギャ難民だけではなくで、世界中他の地域の難民たちに手伝いしたいと思います。／慶応大学の学生がこのドキュメンタリを撮ったのを知ってまず驚きました。素晴らしい作品で、特にアウンティンさんの生まれ故郷マウンドーを望むシーンは特に胸に響きました。／

４．沖縄から平和を考える―映画『戦場ぬ止み』鑑賞　５．８名、４．１名

コメント：移転問題が再熱している頃だったので大変勉強になった。どこかで他人事のように思えていた問題を認識できるきっかけになってよかったと思う。／メディア

からは得られないコンテンツを知れてよかった。／DVD で沖縄の普通に見られない面も見ました。／映画の設定と、伝えたいメッセジーはとても伝わった。／政府に対抗する庶民たちの力はやはり弱いと思って、動画を見たときに無力感を感じました。／2週間をかけて映画を見たので、沖縄の人達が故郷ためにゲートの前や海上で必死にこの土地を守り続けていく決心と行動力、そしてこんな状況の下に、笑顔で歌ったり踊ったりするシーンが本当にインパクトでした。／

５．ゲストトーク：視覚障がい者体験　「障碍から障生へ」　　５．９名

コメント：実際に体験し、話を聞くことで大変勉強になった。障害は誰でも起こりうるもので個性というよりもいつもそこにある当たり前に受け入れて生きていくものだということを学ばせてもらった。／貴重な話が聞けた。／視覚障碍者のように歩いてみたり、視覚障碍者の面倒も学んだりして体験しました／障がいを体験することが珍しかったです。／経験者の意見を聞くのが面白かった。／今の日本社会は中国より障碍者に対する保護はさらに発展しています。これは中国政府が勉強すべきことだと思います。障碍者は社会の弱者として優しく扱われるべきだと思います。／この授業を受けてから、初めてマイノリティのことをなんとなく理解できるようになった気がします。マスクで目を隠した時と他の学生が字を書くことを見ていた時に、心境が全く違うことで、自分がその場でマイノリティとマジョリティの立場が変わったことに気づきました。

６．セクシュアルマイノリティについて　動画視聴と討論　５．６名、４．２名、３．１名.

コメント：日本の性教育が変わり始めていることを学んだ。ディスカッションでは、それぞれの性に関する価値観に触れることができ、今後のジェンダーに対する意識の重要性を再認識できた。／よい機会だった。／様々な新しい情報を得られました。タイもセクシュアルマイノリティが結構いるので興味があります。／動画の内容が面白っかたです。／自分の周りにゲイの友達は何人もいます。私はいつも他人のプライバシーに対して、尊重すべき態度を取りますから、みんなと友達になれます。時々彼らは私と一緒に同性同士との恋について話し合います。／今までずっと興味を持っているトッピクで、授業中にグループ討論で、タイと日本におけるセクシュアルマイノリティの事情を聞き、自分が中国における LGBT の状況はあまり詳しくなかったため、最終発表はこのテーマにしました。／

Ⅳ．授業の方法（机の配置、教員の話し方、資料（PPT、配布資料、板書）の提示、グループ分け、討論の仕方、用具（模造紙、付せん、マーカーなど）の使用など）について、よかった点、改善した方がよい点などを挙げてください。

よかった点：資料が多くて参考になった。／教室の大きさも設備も完全に整えられま

した。グループ活動が多くて、友達と意見が交換できました。／資料（PPT、配布資料、板書）の提示がよっかたと思います／授業に対する先生の指導力、選ばれたトピックの面白さはよかったのです。情報たっぴりで、その日まで存在の事すら知らなかった問題について意見を持つようになりました。／先生の熱心なご指導と毎回皆と話し合いのおかげで、この学期はすごく勉強になりました。／毎回明確なトッピクを取り上げ、授業の内容はとても興味深く、とても勉強になりました。／カラーマーカーや大きな紙があってディスカッションの際に想像が膨らみました。目の見えない人の体験の時も目隠しなどのアイテムがそろっていてありがたかったです。／dvd や本、当事者の参加でリアルなテーマをもっと衝撃的で学ぶことができました。

改善した方がよい点：PPT の字が小さくて、後ろに座ったら、見にくくなってしまいました。／スライドの文字はもう少し大きいほうがよいと思った。ディスカッション時に司会進行役をきめたほうがよかった。全員と１回はディスカッションしたかった。／グループ分けをすることがすくなっかたと思いますけど。／先生は優しいので、声も優しいが、時々聞き取り難しかったのです。ＰＰＴも、バックラウンドが青くて、時間たつと目が疲れたりしました。／資料を取る時に、いつも授業の内容にあう本が持ってこられたらしいですが、もし授業中に回していただければ授業を終わっても引き続き勉強したい時にとても助かります。／

Ｖ．課外活動（朝鮮学校訪問、ロヒンギャ難民講演会、ヒューマンライブラリーなど）について、よかった点、改善した方がよい点があれば書いてください。

よかった点：参加はしていないが、行った人の感想や資料が勉強になった。／別の社会に入って、様々なことを学んだり、体験したりすることができました。／ある問題について私たちはどれぐらいわかろうと頑張っていても、実際にその問題直接合わなければ、理解し難しくなると思います。しかし、例えばロヒンギャ人たちの講演会の時、彼らの話を聞くと本当どれぐらい大変な目に合ってるか、その時理解できたと思います。／授業以外の課外活動が重要だと思います。先生は課外活動を行ってくださって、ありがとうございます！課外活動のおかげで、自分は授業で触れた課題にさらに理解しました。／いつもと違う授業だったので興味深かったです。／課外活動でしか感じられない、得られないことがあると思います。ぜひ参加しなかった方には、機会があれば参加していただきたいです。

改善した方がよい点：授業時間にみんなで行くことができるか、グループ毎での課外時間があると良かった。／授業ではない時間で、時々予定が入っているので、参加したかったですが参加できなくなってしまいました。／時間は大体土日で、時々時間を取られな

っかたけど。／もっと課外活動を参加したいです。

Ⅵ．プロジェクトと最終発表について、よかった点、改善した方がよい点などをあげてください。

よかった点：それぞれ趣向を凝らしていて楽しかった。／多様な発表内容が聞けた。／イブンが興味がある話題を自由に選んで決められました。自分で選んだ話題を友達の話題と関係を付けて、テーマを決めて、グループを作りました。その点で、考えやコンセプトでアレンジされて面白いと思います。／どんなタイトルでも、多文化共生も趣旨をめぐって行けるということがいいと思います。／日本の問題について調べてましたので、日本についての新たな視点を得たと思いました。また皆さんと一つのトピックを様々なところから見えたのはとても楽しかったです。／チームワークはすごくよかったと思います。みんなも力を出して、最後に成功な発表をしました。／資料を取る時に、いつも授業の内容にあう本が持ってこられたらしいですが、もし授業中に回していただければ授業を終わっても引き続き勉強したい時にとても助かります。／いつもと違う授業だったので興味深かったです。／

改善した方がよい点：どのようにしたらいいのか一人目や１グループ目はわからないので、過去の生徒のデータをお手本として使えればいいと思った。／みんなの評価の中で、もっと具体的に書けばいいと思いますけど。／ずっと連絡を取れなかった人がいますから、課題を決める次第、それぞれ担当の部分をすぐその場で決めたほうがいいと思います。／

Ⅶ．この授業を受けて、自分の考えに変化がありましたか。また、今後なにかしたいと思いましたか。

１．授業を受ける前と受けた後で変わったことはありましたか。

周りで起きた日本のニュースや外国のニュースにもっと関心を持とうと思えるようになった。日本人としての自分の意見はどうなるのかと考えて問題を考えるきっかっけになった。／ディスカッションへの参加意欲・姿勢が変わった。／・社会的な面：この授業で新しい友達がたくさん作れました。・日本語スキル：この授業で日本語を聞く・書く・話す機会が増えて上達されました。・考え方：様々な意見を重ねて、これから自分の考えも意見も入っていて変わります。／異文化共生という面で、言語を考えることが初めて感じて、もっと広い視野で言語そのものを考えられることになりました。／この授業を受て、日本の新聞を読み始めたり、周りの人の意見をもっと客観的に聞けるようになったと思います。また、私が今まで知らなかったことの存在も見えて、もっと勉強しないといけないと思いました。／ありました。日本のことを知れば知るほど、日本人の精神世界をさらにわかるようになります。／あります。おそらく誰しもマイノリティになる場合があると常に意識

するようになりました。自分が当たり前だと思っていることが、他人に対して極稀なことかもしれないと思い始めてから、では私は何をすれば相手に尊重を感じさせるだろう。あるいは、もし自分が相手の立場だと、どんな行動されたら不快を感じるのかを考えるようになりました。かわいそうに思っているから行動するのではなく、責任があるからこそ行動をとりたいという考え方に変えたことが一番の変化だと思います。／社会の問題についてもっとよく知れたので視野がひろくなりました。ニュースも前よりもよくわかるようになりました。／

２．これからの学生生活や将来の生活にどのように生かせると思いますか。

日頃流して終わりがちになっている情報について自分なりの考えをもったり、調べてみたりする大切さを学べたのでニュースや記事を読んで考察できると思う。／多文化社会形成に役立った。／この授業で様々な文化や社会問題を学びました。それで、これからの生活にどの文化でも認めて、それぞれの人の考えを尊敬して、一緒に「多文化」の社会で幸せに生活すると思います。／自分の研究内容、研究方法をもっと明らかになりました。将来は研究内容、研究方法を考えることが計画的にしたいと思います。／これからも、ある問題については、ただ一つの点だけじゃないという事を生かしながら、学生生活を続けていきたいと思います。／他人のことを深く理解できます。一人の力が弱いですが、何とかより良い世界のために頑張りたいです。／まずマイノリティについてこれから引き続き勉強していきたいです。遠い場所のことではなく、他人事でもないので、まず自分自身に近いことから掘り下げていこうと思います。交流しないと、やはり他人がどのようなことを思っているのかわからないので、今後勇気を出してできる限り他の人と交流できればと考えます。／社会の問題についてもっとよく知れたので視野がひろくなりました。ニュースも前よりもよくわかるようになりました。／想像もしなかった難民問題を知ってからは、自分の世界はまだ小さいと思うようになりました。問題はどこにでも存在して、ただ自分の平和で居心地良く生きていくのは正しくないと思いました。

Ⅶ．全体として、この授業について、よかった点、改善した方がよい点、感想などがあれば何でも書いてください。

よかった点：様々な国の人と関われたことはすごく有意義だった。授業を通して興味を持った題材もあった。友達ができた。資料や体験が多かった。／ディスカッションが多くできた点。／様々なテーマで毎回同じではない内容を学べて、面白かったです。／全体としては、ほかの国の留学生と一緒に多文化の授業を受けられて、前よりより広い視野、より深い考えで、コミュニケーションということを理解できるようになりました。／日本の事をもっと詳しく見せて、外から完璧に見えても、中には様々な問題が存在していという事を教えていただけました。日本の事をもう少し現実的に見えたと思っています。／多文化理解という授業なので、他の授業よりもっと包容的で、話し合ったらそんなにストレ

スを感じていなかったです。雰囲気がとてもよかったです。最後の授業では、グループ分けでこの授業を振り返ってみましたが、各自多文化に対する理解を話し合い、異なる観点を必死に説明する時の光景を見てこの授業の楽しさを改めて感じました。／外国人はもちろんですが、日本人の学生、岡先生の日本の社会問題に対する率直な意見が聞けてとてもためになった授業でした。日本人は社会問題に対して意見を言わない印象だったので、日本人のイメージがかわりました。

改善した方がよい点：グループワークまで留学生と話すのが難しかった。授業時間の延長が多い。／全員参加する形でのフィールドワークがあったらよかった。（活動が授業時間意外だったのであまり参加できなかった。）／みんなは一緒に座ったほうがいいと思います。／前からも思ってましたが、ボランティア活動をしたいと思います。この授業で知った多文化共生から生じるメリットとデメリットで一緒にボランティア活動をする人に知ってもらって、私のだけではなく、周りの知識をもっと広めたいと思います。